

靈山道隱と『業識団』について

佐藤 秀孝

はじめに

鎌倉末期に中国（元朝）から日本に渡来した靈山道隱（仏慧
禪師、一二五五—一三三五）は臨濟宗破庵派に属する臨濟禪者
であり、主として鎌倉禪林を中心に活躍したことが知られて
いる。その門流は日本禅宗二十四流の一つに数えられてお
り、仏慧派・靈山派あるいは師匠の雪巖祖欽（慧朗禪師、？—
一二八七）にちなんで雪巖派（雪岩派）とも称されて一家をなし
たようであるが、日本における道隱の活動がきわめて短期間
に限られていたこともあって、門流としては後世に大きく展
開することなく終わっている。したがって、今日、道隱その
人に注目した論考は皆無に近く、同時期の来日元僧らの中
では日本禅宗史上に果たした役割などもあまり明確でないのが
実情である。

玉村竹二『五山文学—大陸文化紹介者としての五山禅僧の

駒澤大學佛敎學部論集第二十八號 平成九年十月

活動—』（日本歴史新書）の「五山派」の項によれば、道隱の
系統に関して派名を雪岩派とし、日本禅の系統としては二十
四流の順位で第一四番に、四十六流（四十六伝とも）の順位で
第一九番に、五十九流（五十九伝とも）の順位で第二二番にそ
れぞれ道隱の名が挙げられている。東京大学史料編纂所所蔵
『諸宗儀範』巻一「仏心宗祖」の「二十四流祖」にも一四番
目に「建長靈山（東渡）」と記されている。

道隱は元代の来日僧としては中期に属する禅者であり、臨
濟宗松源派（焰慧派祖）の明極楚俊（仏日焰慧禪師、一二六二—
一三三六）や破庵派（大鑑派祖）の清拙正澄（大鑑禪師、一二七
四—一三三九）ら第一等の禅僧が来日する以前の鎌倉禪林にお
いて、曹洞宗宏智派（東明派祖）の東明慧日（白雲、一二七二—
一三四〇）や臨濟宗曹源派の東里弘会（德慧、？—一三一八）
らとともに重きをなしている。

道隱は無準下の雪巖祖欽の門流ではその先がけ的な存在と

して来日しており、とりわけ、破庵派で幻住派祖に当たる中峰明本（智覚禪師・普応国師、一二六三—一三二三）は道隱の法姪に当たっている。道隱の来日につづいて、幻住派の禪者を中心に祖欽の門流に連なる中国からの来日僧や渡航した帰国僧が相繼いで日本禅林に化導を敷くことになるわけであり、その面では道隱はまさにそんな雪巖下の禪者たちの道しるべ的な位置にあったといつてよからう。

今回、この論考をまとめるに至った因由は、たまたま道隱の詩文集である『靈山和尚業識団』（以下、単に『業識団』と略称する）を国立国会図書館内閣文庫において閲覧し、その内容に注目したことにある。『業識団』一卷は内閣文庫に写本として伝えられるほかに、京都大学付属図書館にも『隱靈山業識団』一卷の写本が存している。いまのところ、この二本のほかに所蔵が確認されていない貴重本である。しかも内容的には来日後の記事が見られず、すべて道隱の在元中の作のみを収めているため、これまでほとんど顧みられることがなかった文献である。『業識団』を通して元代初中期の中国禅林の消息の一端を知ることが可能である点から、以下、「靈山道隱と『業識団』について」と題して一考をなしてみることにしたい。

ところで、道隱に関する伝記史料としては、古い基本的な行状・塔銘などが伝えられていないことから、概ね江戸期の燈史・僧伝の記載に依らねばならない。すなわち、江戸期の

燈史・僧伝としては、『東渡諸祖伝』巻上「宋靈山隱禪師伝」と『延宝伝燈録』巻四「相州建長靈山道隱禪師」の章と『本朝高僧伝』巻二四「相州建長寺沙門道隱伝」があり、ほかに『東渡諸祖伝』の内容を受ける『二十四流稽疑』巻下「第五東渡宋靈山隱禪師畧伝」も存している。また『鎌倉五山記』『五山記考異』『関東五山記』『扶桑五山記』などの鎌倉五山の建長寺や円覚寺の箇所にも簡略ながら道隱の記事が存している。

これらの基本的な伝記史料を並記しつつ、以下に道隱の足跡を整理してみることにしたい。その際、各史料はつぎのごとく略称するものである。

東渡…『東渡諸祖伝』巻上「宋靈山隱禪師伝」

延宝…『延宝伝燈録』巻四「相州建長靈山道隱禪師」の章

本朝…『本朝高僧伝』巻二四「相州建長寺沙門道隱伝」

稽疑…『二十四流稽疑』巻下「第五東渡宋靈山隱禪師畧伝」

出生と郷関

東渡…禪師、諱道隱、号_レ靈山、不_レ知_二何許人_一、亦不_レ詳_二其姓氏_一。

延宝…宋国杭州人。

本朝…釈道隱、号_二靈山_一。不_レ詳_二其氏族_一。宋杭州人。

稽疑…師諱道隱、号_二靈山_一。不_レ知_二何許人_一、亦不_レ詳_二其姓氏_一。

この人は禅僧としての名すなわち法諱（僧名）を道隱といひ、道号（字）を靈山と称している。靈山というのは山号・寺

号の類や地名ちみんなどではなく、南宋禅林に流行していた道号または字であり、読みとしては「りんざん」と称していたようである。以下、便宜上、本稿においては法諱の道隱をもって統一的に表記していくことにしたい。

『東渡諸祖伝』や『二十四流稽疑』では道隱の出身地や俗姓について不詳としているが、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』では辛うじて出身を杭州（浙江省）の人としている。この点、先に触れた道隱の法諱と道号は明らかに杭州錢塘県西に存する北山景德靈隠禅寺すなわち禅宗五山第二位の「靈隠」にちなむものであるから、杭州という説はおよそ妥当なものと見てよいであろう。杭州は南宋の国都臨安府の所在地であり、西湖の絶景や錢塘江の大海嘯（浙江の潮）などで知られる江南の景勝地であって、おそらく道隱は杭州府城かその近隣（錢塘県など）に出生したものと推察される。村井章介「渡来僧の世紀」（『東アジア往還—漢詩と外交—』所収）などによれば、今日、宋・元代に來日を果たした多くの中国禅僧の中にあっても、明確に杭州出身とされているのは、わずかにこの道隱のみであって、その点でも注目すべきものがある。

また道隱が出生した年月日については、何れの史料にも具体的な記載は存していないが、示寂年時から世寿を逆算することによって、南宋末期の宝祐三年（一二五五）に出生していることが知られる。したがって、道隱は南宋末期に国都杭州

臨安府に生を受けているわけであるが、当時、南宋はすでにその国力が低下して滅亡への道を歩んでいる。北方の蒙古民族が金を滅ぼし、国名を元と称して南下侵攻し、南宋の各地を脅かしていた時期に相当している。南宋の完全な滅亡は元の至元一六年（南宋の祥興二年、一二七九）すなわち道隱が二五歳のときのことであり、道隱はその前半生をまさに国家存亡の渦中に生きたことになる。

道隱の父母についてはその俗姓や消息などが何ら定かでないものの、わずかに『業識団』には、道隱の父母のためになした偈頌として

葬父母^一

真空有^レ穴力安排、曠劫双親一^レ処埋、凍雨乍^レ收山路滑、何為^レ赤脚^二着^三芒鞋^一。

という作が伝えられている。これは時期こそ不明ながら両親が相継いで逝去したため、道隱が父母の遺骨を一カ所に埋葬した際のものにほかならない。状況からすると、道隱が仏門に投じて後まで両親は健在であったものと見られ、両親は道隱の手で自ら葬られたものである。世俗の塵埃を捨てて出家した身とはいえ、道隱にとって両親への恩愛が如何に深かったかが察せられよう。

出家と華嚴学の修得

東渡…少乘^二奇操^一、慧解不^レ倫、游^二刃衆典^一、尤喜^二華嚴^一。

延宝…早歳出家。

本朝…蚤脱塵纏。

稽疑…少乘奇操、慧解不倫、游刃衆典、尤喜華嚴矣。

道隱が何歳で出家したのかは定かではないが、『延宝伝燈録』によれば「早歳に出家す」と記されており、『本朝高僧伝』によれば「蚤くして塵纏を脱す」と伝えられている。蚤というのも早歳とか弱年の意であるから、道隱はかなり若くして一〇歳代には世俗の塵埃を捨てて出家の道を歩んだものと見られる。

一方、『東渡諸祖伝』やこれを受ける『二十四流稽疑』によれば、道隱の若い頃の消息として、

少くして奇操を乗って、慧解は倫ならず、刃を衆典に遊ばせ、尤も華嚴を喜しむ。

と記されている。奇操とは並外れてすぐれた志や気風のことであるから、道隱は幼きより優れた気風を心に堅く守り、智慧をもつてものごとを理解することに長けていたようであり、その点からすると、おそらく幼くして父母の理解と許可を得て出家の道を歩んでいるものと推測される。

游刃とは庖丁の故事にちなむもので、ここでは典籍を自由に見こなした意味であろう。出家した道隱はかなり仏教の研鑽に邁進したもので、思うがままに多くの典籍（おそらく経論）を讀破し、とくに『大方広仏華嚴経』（以下、

単に『華嚴経』ないし華嚴関係の典籍を好んだことが知られる。実際に『業識団』を窺ってみると、「血書華嚴経」「血書華嚴経有舍利」「沢山和尚墨書華嚴経」「善財」「送華嚴講主」などといった偈頌が存し、そのほかにも随所に『華嚴経』にちなむことばが見られることから、道隱はかなり華嚴の数学に精通していたことが窺われる。

また、それとともに『業識団』には「血書法華経」「血書金剛経」「看藏経」「人間円覚経大光明藏以偈答」などの偈頌が残されているから、道隱は『妙法蓮華経』『金剛般若波羅蜜多経』『大方広円覚修多羅了義経』といった諸經典に対する見識も高かったものと推測される。

これらの經典はともに南宋禅林でも盛んに読まれていたらしく、道隱もまた当時の中国仏教界の趨勢に則ってこれらを参究していたものと推測される。しかも「血書」ということばが多く見られることは注目され、道隱はこうした諸經典を筆写する際に自らの血液を墨の代わりに使っているのだから、かなり経文の一字一句に対して切実な願いを込めて写経をなしていたことが知られる。

おそらく道隱は幼くして郷里杭州内の教院に投じて童子行者（童行）などとして従事し、年満ちて後に出家得度し、さらに二〇歳前後になって具足戒（比丘戒）を受けているものと見られる。ただし、『業識団』によっても、道隱が出家あるい

は受具した年時はもちろんのこと、受業師その他に關しても具体的にはまったく窺うことができない。この間、おそらく道隱は『華嚴經』に基づく華嚴教学を中心に研鑽し、さらに『法華經』『金剛經』『円覺經』などといった主だった諸經典を学び、教学に対する一般的な理解を深めていったのであろう。

仰山の雪巖祖欽との機縁

東渡…参雪岩欽和尚得旨。

延宝…依雪巖欽于仰山。巖俾看狗子無仏性話。稍久契悟、

呈偈曰、妖嬈万態逞余芳、華品名中占得王、莫把傾城比顔色、從來家國為伊亡。巖印之。

本朝…参仰山雪巖禪師。巖俾看狗子無仏性話。久之契悟、

呈偈曰、妖嬈万態逞余芳、華品名中占得王、莫把傾城比顔色、從來家國為伊亡。巖便印可。

稽疑…嗣法袁州仰山慧朗禪師雪岩祖欽和尚。無準範之的孫而

系楊岐第十一世之孫也。

『華嚴經』を中心として教学に親しんだ道隱は、その後、禪門に投じて参禅学道を志したもののらしく、郷里杭州を捨てて遙か江西に歴遊し、袁州（江西省）の仰山に到って破庵派の雪巖祖欽に参学することになる。

道隱が辿り着いた仰山とは袁州宜春縣南六〇里に存し、一

靈山道隱と『業識団』について（佐藤）

名を大仰山とも称しており、唐末に瀉山下の仰山慧寂（小釈通・智通大師、八〇七—八八三）が棲隱禪寺を開創したことに始まる江西の名刹である。この寺はもともと慧寂の師である瀉山靈祐（大円禪師、七七一—八五三）が開いた潭州（湖南省）寧郷県西一四〇里の大瀉山の同慶禪寺・密印禪寺とともに、禅宗五家の一派である瀉仰宗の発祥地として知られ、南宋末期から元代にかけては仰山太平興国禪寺として禅宗甲刹の一つに列せられている。仰山に關する寺志として『仰山乘』五卷が存しているが、残念ながら祖欽ら宋元代の住持者については何ら触れられていない。

ところで、道隱の本師となった雪巖祖欽については、『増集続伝燈録』卷四「袁州仰山雪巖祖欽禪師」の章や『続燈正統』卷二「袁州府仰山雪巖祖欽禪師」の章などによって簡略な伝記が知られ、これに『雪巖和尚語録』卷二「普説」の「仰山普説」で祖欽自身が述べる内容などを加味することによってその参学期の消息が知られる。祖欽は一に法欽ともい、婺州（浙江省）の人とも閩（福建省）漳州の人ともされ、幼くして出家して婺州義烏県の雲黄山宝林禪寺（双林寺）において曹洞宗宏智派の短蓬遠（遠鉄樵、？—一二四七）に曹洞宗旨を学んでいる。さらに一九歳で杭州錢塘県の北山景德靈隠禪寺において大慧派の妙峰之善（一一五二—一二三五）に参じ、また杭州錢塘県の南屏山浄慈報恩光孝禪寺において松源派の滅

翁文礼（天目、一一六七—一二五〇）に随っている。その後、杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に上山して当代の巨匠として名高かった破庵派の無準師範（仏鑑禅師、一一七七一—一二四九）の門に投じて参禅学道し、ついにその法を嗣いでいる。

『雪巖和尚語録』巻一に載る六会の上堂語録によれば、祖欽は宝祐元年（一二五三）八月一日に潭州（湖南省）の龍興禅寺にはじめて開堂出世しており、潭州湘西の嶽鹿山道林禅寺（鹿苑寺）を経て処州（浙江省）の南明山仏日禅寺や台州（浙江省）仙居の護聖禅寺さらに湖州（浙江省）の光孝禅寺へと遷住しており、咸淳五年（一二六九）に袁州の仰山に入院したとされる。咸淳五年といえは道隱はいまだ一五歳にすぎず、道隱が仰山に祖欽を訪ねたのはおそらく二〇歳をかなり過ぎてからと見られ、道隱の来参は祖欽にとつてかなり晩年のことであつたといえよう。

杭州で育つた道隱は幼き頃よりすでに亡き破庵派の無準師範が杭州の径山で活躍した高德を風聞していたはずであり、その法嗣たちの多くが相継いで他界した中に在つて、ひとり祖欽が遙か仰山になお健在であつたことから、遠路を厭わず江西の地に祖欽を訪ねたのではなからうか。

ところで、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』によれば、祖欽は会下に到つた道隱に対して「趙州狗子無仏性」の公案を課したとされる。すなわち、『延宝伝燈録』によれば、

巖、狗子無仏性の話を看せしむ。稍や久しくして契悟し、偈を呈して曰く、「妖嬈たる万態、余芳を逞にし、華品名中に王を占得す、傾城を把つて顔色に比すること莫かれ、従来、家国は伊が為めに亡ぶ」と。巖、之れを印す。

と記されており、『本朝高僧伝』もほぼ同じ内容の機縁を伝えていゝ。これによれば、道隱は祖欽から与えられた「狗子無仏性」の古則をやや久しく参究したものらしく、やがて契悟するところがあつて一偈を祖欽に呈している。両者の具体的な問答商量などは記されていないものの、その偈を見た祖欽は道隱を印可したといふのである。

「趙州狗子無仏性」の話頭とは、『宗門聯燈会要』巻六「趙州観音従諭禅師」の章によれば、

僧問、狗子還有_二仏性_一也無。師云、無。僧云、上至_二諸仏_一、下及_二螻蟻_一、皆有_二仏性_一、狗子為_二甚麼_一却無。師云、為_下伊有_二業識_一在_上。

というものであり、唐末に南嶽下の趙州従諭（實際大師、七七八—八九七）が一僧の問いに対して「狗子に仏性はない」と答えた有名な古則公案である。

ところで、この偈頌はもともと道隱自身が『業識団』にて、
狗子無仏性話、呈_三再来老和尚_一。

妖嬈万態逞_二余芳_一、花品名中占_二得王_一、莫_下把_二傾城_一比_中顔色_上、従来家国為_レ伊亡。〈古詩〉

として載せているものにほかならない。ここにいう再来老和尚というのが祖欽のことであり、祖欽が示寂して後に仰山に遺骨が葬られ、再来塔と称せられたことにちなむものである。おそらく祖欽は長期にわたって仰山に住持してその興隆に尽力したため、生前から仰山慧寂の再来と讃えられていたのであろう。

ところで、この「狗子無仏性」の話頭は南宋初期の大慧宗杲（妙喜・大慧普覚禪師、一〇八九—一一六三）や南宋末期の無門慧開（仏眼禪師、一一八三—一二六〇）によって公案禪の第一関門として位置づけられて以来、とくに無字の公案として臨済宗で重視せられている。ただ、曹洞宗でもしだいに重視されるようになっていたものらしく、祖欽はかつて宏智派の短蓬遠の席下で「狗子無仏性」を参究しており、また『雪巖和尚語録』巻四「法語」の「規上人」においても、

浄和尚道、只箇無字鉄掃帚、掃不_レ得_レ処_レ揀_レ命掃、忽然掃_レ破太虚空、万別千差_レ尽_レ豁通。是_レ則_レ固_レ是、只是未_レ免、誤_レ賺_レ後昆。
瞎_レ将来眼。殊_レ不_レ知、我王庫内無_レ如_レ是刀。

と真歇派の長翁如浄（浄長、一一六二—一二二七）がこれを重視したことを強調している。したがって、無字の公案はその扱い方が臨済宗と曹洞宗で幾分は相違するものの、当時、南宋禅林に広く参究されていた古則であったわけである。こうして祖欽は道隠の悟道を印可しており、道隠は無準師範の法孫

として臨済宗楊岐派の一員に列したわけである。

『増集統伝燈録』巻五（目録）には「仰山雪巖欽禪師法嗣」として「天目高峰原妙禪師」「径山虚谷希陵禪師」「道場及庵信禪師」「靈雲鉄牛持定禪師」「高麗鉄山瓊禪師」の五人を見録し、無伝として「薬山天隠円至禪師」「慧力海印昭如禪師」「達本陡崖戒禪師」「華蔵無涯浩禪師」「万寿黙翁一禪師」「茶陵無學習禪師」「石溪無一全禪師」の名を挙げている。ここには祖欽の法嗣として都合一二人の名が伝えられるものの、残念ながら道隠の名は見い出せない。おそらく『増集統伝燈録』の編者である松源派の南石文琇（一二四五—一四一八）は、日本に赴いた道隠の存在など知る由もなかったであろう。

一方、日本撰述の宗派図として、『仏祖宗派図』では祖欽の法嗣として「仰山古心誠」「宝林瞎驢欽」「行己恭書記」「東山鉄牛特定」「木平海印昭如」「百丈如菴愚」「万寿黙翁一」「径山虚谷希陵」「天隠円至書記」「東山鉄山紹瓊」「道場及菴信」「建長靈山道隠」「天目高峯原妙」という一三人の名を載せ、また『正誤宗派図』四では「慧力海印昭如」「天目高峯原妙」「万寿黙翁一」「百丈如菴愚」「行己恭書記」「石溪無一全」「径山虚谷希陵」「靈雲鉄牛持定」「達本陡崖戒」「茶陵無學習」「宝林瞎驢欽」「天隠円至書記」「道場及菴宗信」「華蔵無涯浩」「高麗鉄山紹瓊」「建長

靈山道隱」という一六人の名を載せているが、その中には当然のことながら道隱の名も含まれている。これら日中両史料を合わせると祖欽には一七人の法嗣の名が知られることになり、そのほか廬山の無極志源の存在なども伝えられている。

このように祖欽の高弟には高峰原妙（普明広濟禪師、一二三八—一二九五）や鉄牛持定（特定とも、一二四〇—一二三〇）さらに海印昭如（普照大禪師、一二四六—一二三二）や虚谷希陵（西白・仏鑑禪師、一二四七—一二三二）および及庵宗信などすぐれた禪者が輩出しているが、道隱もまた彼らとともに祖欽の嗣法門人のひとりに列していたわけである。ただし、道隱は年齢的には祖欽の門下でもかなり末弟に属していたものと見られ、祖欽が前至元二四年（一二八七）に七〇余歳で示寂したときには、道隱はようやく三三歳になったばかりであり、この年の冬には原妙はすでに杭州臨安県の西天目山師子正宗禪寺に住持している。

ちなみに祖欽には法嗣に靈山道隱のほか高麗（朝鮮半島）に赴いて化導を敷いた鉄山紹瓊の存在が知られ、『雪巖和尚語録』巻四「序」によれば、さらに友山必謙・雲山永徳・静山普寂・中山道宝らの名が知られることから、祖欽は参学門人に「山」の付いた道号を好んで用いたものらしい。

ところで、『業識団』には、いま一つ道隱が祖欽のためになした作品として、

礼辞仰山再来塔。

蘿龕三透礼慈顔、欲別無言展步難、隊々野猿声切切、溥々玉露淚漣々。

という偈頌が伝えられている。これは祖欽が至元二四年に示寂し、茶毘に付されて再来塔に遺骨が納められて後、道隱が仰山を下山する際に祖欽に対する師育の恩に涙し、その墓塔を去り難い心情を切々と詩い上げたものにほかならない。したがって、道隱は師の祖欽が示寂して墓塔が建立されるまでは仰山に留まっていたものと見られ、後事万般が終了して後に仰山を辞したのであると推測される。

諸山歴遊と蔵主職

東渡

延宝

本朝：萍遊江湖、謁一時名柄。後入経蔵、多歴寒燠。

稽疑

祖欽の最後を看取って仰山を去った後、道隱が如何なる行動をとったのか、祖欽が示寂してより道隱が来日するまでの期間は実に三〇余年もの久しきに及んでいる。燈史・僧伝でその間の消息を伝えるのはわずかに『本朝高僧伝』のみであるが、そこでもわずかに、

江湖に萍遊して、一時の名柄に謁す。後に経蔵に入りて、多く

寒煖を歴る。

と記されるにすぎない。これによれば、その後、道隱は行方定めずに雲遊して江湖の叢林を經巡り、当代に名ある禪者に謁見したもののようであり、その一方で後には寺内の經藏に入って仏典・禪籍などの研鑽に多くの歳月を費やしたというのである。道隱には參禅學道に努める一方で學解にもかなり精通する、いわゆる行學一如の宗風のごときものを窺うことができよう。

そこで、いま『業識団』の作品の中で道隱が直接に関わつたと見られる禪者に対する偈頌を整理することによって、道隱の行動範圍と參學あるいは交流した禪者らを大まかに分類して見ることにしたい。

すなわち、『業識団』には道隱が接触した禪者に対する偈頌または寺院・史蹟を歴遊した際の偈頌として、「平江万寿南洲和尚三題」「洞宗自得和尚三題、和末宗和尚韵」「沢山和尚墨書華嚴經」「寄平江万寿南洲老和尚」「寄中竺元叟和尚」「靈隱起方丈閣」「礼玄沙塔」「寄徑山鑑西堂」「普陀求觀音現、印藏經、歸五臺」「寄天童雲外和尚」「賀金山後堂首座」「和承天禹溪和尚臘月三十日雪韵」「悼雪峰首座」「福州西禅柏堂和尚五題」「寄金山首座」「和虎丘維那」「哭天目高峯和尚」「悼中竺布衲和尚へ有舍利」」「題洞宗寄建康天寧木瓶和尚」「明

州海首座江西死、訃音至悼之」「呈高峯和尚万法歸一話

「和清凉古林和尚」「借前韵寄灌頂用剛和尚」「借前韵寄彰勝古源和尚」「和光瑞翁建歸雲寺韻」と「呈大夢へ此老和尚後於五臺山立化、舍利不可勝計」「贈光藏主」「寄城中才無溪」「拉古樵遊天目」「送洞宗明首座住院」「寄儔独山住菴」「拙翁和尚問兜率三閩、繼答之」といった作が見い出せる。

そこではじめに道隱が関わつた禪者らで足跡の明確な人について簡略に整理してみることにしたい。ただ、『業識団』一卷は年代順に整理してまとめられたものではないようであるから、以下に取り上げる事跡はあくまでも偈頌の掲載順にすぎず、内容的にはさらに整理して考えねばならない。

南洲和尚とは松源派の石溪心月（仏海禪師、？—一二五六）の法嗣である南洲永珍のことであり、「平江万寿南洲和尚三題」や「寄平江万寿南洲老和尚」が存するから、道隱は蘇州（江蘇省）平江府治東北の天寧万寿禅寺に住持していた永珍に參學し、永珍の示す「目前不物」「声前一曲」「独脱無依」という三つの禅の機関について研鑽を深めたものと見られる。

末宗和尚とは破庵派の断橋妙倫（松山子、一一〇一—一二六一）の法嗣である末宗徳本（永宗とも）のことであり、福州（福建省）侯官県の怡山西禅寺（長慶禅院）に住持したことが知られている。妙倫は雪巖祖欽の法兄であるから、道隱と徳

本は法系上の従兄弟ということなるう。「洞宗自得和尚三題、和末宗和尚韵」とあるから、道隱は徳本に和韻して曹洞宗宏智派の自得慧暉（一〇九七—一一八三）が示した機関である「坐禅得妙」「用中得妙」「牀中得妙」という三題に偈頌を付している。徳本の行実などは定かでないが、おそらく徳本は慧暉の門流に連なる宏智派の禅者に学ぶ機会があり、慧暉の禅風を慕っていたものと見られ、道隱もまた徳本と親しい道交をなして慧暉の禅に通じていたのであろう。

沢山和尚とは松源派の覚庵夢真の法嗣である沢山弑威（一威とも）のことであり、江州（江西省）廬山の東林禅寺に住持して至大四年（一三二一）に『禅林備用清規』一〇巻を編集したことで名高い。「沢山和尚墨書華嚴経」とあるから、道隱は弑威が墨書した『華嚴経』に対して偈頌を寄せているわけである。

元叟和尚とは大慧派の蔵叟善珍（一一九四—一二七七）の法嗣である元叟行端（慧文正辯仏日普照禅師、一二五五—一三四一）のことであり、奇しくも道隱と同じ年の生まれである。『慧文正辯仏日普照元叟端禅師語録』巻二「住杭州路中天竺万寿禅寺語録」によれば、行端は大徳九年（一二〇五）五月一六日に杭州钱塘県の中天竺万寿永祚禅寺に住持したことが知られ、また中順大夫秘書少監致仕の黄潛（字は晋卿、一二七七—一三五七）が撰した「塔銘」によれば、皇慶元年（一二三二）に同

じ钱塘県の北山景德靈隠禅寺に遷住していることから、道隱が行端に「寄中天竺三元叟和尚」の偈頌を寄せた時期もその間に限られることになるう。

雲外和尚とは曹洞宗宏智派の雲外雲軸（妙悟禅師、一二四二—一二三四）のことであり、延祐二年（一二三二）に明州鄞県の天童山景德禅寺に住持している。雲岫は直翁可拳（徳拳・静慧禅師）の高弟として元代江南の曹洞宗の孤壘を一身に担った禅者であり、「寄天童雲外和尚」とあるから、道隱は天童山において雲軸と関わっていたわけである。とりわけ、道隱が当時の曹洞宗（とくに宏智派）とかなり交流していたことは注目され、先に述べたごとく雲岫の法祖に当たる自得慧暉の禅の機関を取り上げているほか、「題洞宗、寄建康天寧木瓶和尚」や「送洞宗明首座住院」という偈頌が存している。曹洞宗と題する偈頌を残したり、曹洞宗である明首座の住山入院を送る偈頌を与えているのであって、その面では『業識団』は元代初中期の江南の曹洞宗の実態を知る上でも貴重な資料を提供しているわけである。後に来日した道隱は雲岫の法弟である同じ来日僧の東明慧日と道交を結ぶことになるわけであるが、その背景には師の祖欽が曹洞宗旨に造詣が深かったことや道隱自身も雲岫ら曹洞禅者と関わりが深かったことなどが挙げられよう。

禹溪和尚とは松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六

九)の法嗣である禹溪一了(一予とも)のことであり、この人は日本の南浦紹明(円通大応国師、一二三五—一三〇八)と同門に当たっている。一了は明州奉化県西の雪竇山資聖禪寺に化導を敷いた禪者であるが、「和承天禹溪和尚臘月三十日雪韻」の偈頌によって蘇州平江府吳県西北の承天能仁禪寺にも住持していたことが判明する。おそらく道隱は承天寺の一了に直に接し、一了が示した「臘月三十日雪韻」という偈頌に和韻しているわけである。

柏堂和尚とは時期的に見て松源派の石溪心月の法嗣である柏堂祖森のことと見られ、さきの南洲永珍と同門に当たっている。祖森は西蜀(四川省)重慶の人で、心月に嗣法して後、諸山を経て福州侯官県西の怡山西禪寺(長慶禪院)に住持している。道隱が「福州西禪柏堂和尚五題」と示す偈頌とまさに合致するわけであるが、『雪峰志』巻五「紀当山」の「第四十八代祖森禪師」の項によれば、祖森は至元二三年(一二八六)に同じ侯官県西の雪峰山崇聖禪寺に遷住して化導を敷いており、その後、再び西禪寺に居住しているから、道隱が祖森と関わったのは再住後のことであろう。

高峰和尚とは道隱の法兄に当たる高峰原妙のことであり、「哭三天目高峯和尚」とあるから、原妙が杭州臨安県西五〇里の西天目山大覚禪寺において元貞元年(一二九五)一二月一日に世寿五八歳で示寂した際に、道隱が同門の法兄である原

妙のためになした追悼の偈頌であることになろう。道隱が実際に西天目山に到って原妙の最期を看取ったか否かは明確でないが、あるいは単に原妙の訃報に接し、その威徳を偲んだのかも知れない。また「呈高峯和尚一方法帰一話」の偈頌も存するから、道隱は原妙の生前におそらく「趙州万法帰一」の話頭について自らの見解を原妙に呈していることが知られる。祖欽の示寂して後、道隱は法兄の原妙に随うことが多かったのかも知れない。

布衲和尚とは原妙の高弟で道隱にとっては法姪に当たる布衲祖雍(?—一三二七)のことであり、はじめ原妙の後席を継いで西天目山大覚寺に住持していたが、後に杭州錢塘県西の靈隠山に存する中天竺万寿永祚禪寺に遷住している。「悼中天竺布衲和尚(有舍利)」とあるから、祖雍が延祐四年(一二一七)に中天竺寺の桂子堂にて示寂し、荼毘の際に舍利が得られたことにちなみ、道隱としても追悼の偈頌を残したのである。原妙の高弟であった祖雍は法姪とはいえ、おそらく法叔の道隱とほぼ同世代であったものと見られる。

木瓶和尚については法諱や足跡などが定かでないが、「題洞宗(寄建康天寧木瓶和尚)」とあるから、建康(南京)の天寧禪寺に住持していたことが知られる。しかも道隱はこのとき「題洞宗」として木瓶に偈頌を寄せているのであるから、木瓶は曹洞の嗣承を受ける禪者であったか、または曹洞の宗旨

にかなり深く精通した臨濟禪者であったものと推測される。

古林和尚とは松源派の横川如珙(行珙とも、一二三二—一二八九)の法嗣である古林清茂(金剛幢・休居叟・扶宗普覺仏性禪師、一二六二—一三二九)のことであろう。ただし、ここでは「和_二清涼古林和尚_一」とあるから、当時、清茂は清涼という名の禪寺に在ったことになろう。清茂が清涼寺に住したという記録は存しないから、このときは住持ではなく寓居の身であったものと見られ、状況的に清涼寺とはおそらく建康上元県西の石頭山清涼広慧禪寺あたりを指していると推測される。清茂は道隱より若干の後輩であるが、元代中期には先の中峰明本とともに数多くの日本僧が来参したことで名高く、その門流(金剛幢下)は日本禅林に多大な影響を及ぼしている。道隱は清茂を良友と語っており、かなり親しい道交をなしていたのかも知れない。また「六十二年成_二夢_一」とあるから道隱が六二歳すなわち延祐三年(一三二六)のできごとであったものと見られる。

「借_二前韵_一寄_二灌頂用剛和尚_一」とある用剛和尚と「借_二前韵_一寄_二彰勝古源和尚_一」とある古源和尚および「和_下光瑞翁建_二帰雲寺_一韻_上」とある瑞翁光の三禅者についてはその足跡や住持地を含めて定かでない。ただ、『東福寺史』の「文保元年」の項ではこの古源和尚を聖一派の古源邵元(契源、一二九五—一三六四)と解しているが、『業識団』が在元中の作で

あることから、この古源和尚が中国禅僧であることは動かないであろう。ちなみに「借_二前韵_一寄_二彰勝古源和尚_一」には「我れ今年六十二」という表現が見られるから、やはり延祐三年のできごとであったことが判明する。

大夢和尚とは楊岐派の癡鈍智穎の法嗣である大夢徳因(一七八—一二四一)のことかとも推測したが、徳因は福州侯官県西の雪峰山崇聖禪寺や、明州鄞県東南の阿育王山広利禪寺などに住持したことが知られるものの、『雪峯志』巻五「紀当山」の「第三十七代徳因大夢禪師」の項によれば、淳祐元年(一二四一)に世寿六四歳で示寂しているから、ここにいる大夢とは全く別人ということになる。「呈_二大夢_一」では「此の老和尚、後に五臺山に於いて立化し、舍利は勝げて計う可からず」と記しているから、後に遥か太原(山西省)の五臺山において立亡していることになる。

無溪才についてはその嗣承など全く定かでない。「寄_二城中才無溪_一」とあるが、ここで城中というのは建康(南京)などを指すのであろうか。古樵については、楊岐派の石橋可宣の法嗣に古樵侃という禅者の名が知られるが、世代的に合致しないようであり、その消息は定かでない。あるいは単に古老の樵夫に案内されての意味なのかも知れない。ただ、「拉_二古樵_一遊_二天目_一」とあるから、道隱は古樵と連れだって天目山に遊んだことが知られ、おそらく法兄の高峰原妙を西天目山

に訪ねたときの作であろうか。

独山儔についてもその嗣承など全く定かでないが、「寄儔独山住菴」とあるから、道隱は独山儔が庵を結んだ際に餞別の偈頌を寄せていたのであろう。拙翁和尚についても、やはり如何なる経歴の禅者か定かでないが、「拙翁和尚問_ニ兜率三関_一、継答_レ之」とあるから、拙翁が黄龍派の兜率從悦（真寂禅師、一〇四四—一〇九二）にちなむ「兜率三関」の古則について問いを下したのに対し、道隱が偈頌をもってこれに答えたものである。おそらく拙翁は道隱と同世代の人であったか、あるいは若干の後輩に当たっていたのであろう。

また『業識団』の末尾には、幸いにも道隱の法兄に当たる虚谷希陵がつぎのような簡略な跋文を寄せている。

靈山首座、向_ニ赤肉団上壁立万仞処、拶_ニ出一句。如_レ氷如_レ霜、如_レ金如_レ玉、衲僧咬嚼不_レ破。謂_ニ余不_レ然、請_ニ閱_ニ是錄_一。

延祐己未春、径山老叟希陵題。

そこには「延祐己未」という年記が記されており、希陵が杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺の住持として延祐六年（一二三一九）春に題したものであることが知られる。このとき希陵は道隱に対して「靈山首座」と称しているから、当時の道隱は希陵を助化して径山の首座として活躍していたことにならうか。『業識団』には「結夏秉_レ弘」や「冬節秉_レ弘」が収められているから、径山かあるいは何れかの禅寺において道隱が首

座すなわち第一座を勤めたことは間違いない。ただ、このとき道隱はすでに六五歳にもなっており、なお首座位に留まっていたのであれば、あまり長い修行期間ということになる。もちろん、この間に何れかの小禅院の住持を勤めた可能性も存しようが、道隱が来日以前に中国叢林の住持を勤めたということは何れの史料も伝えていない。

以上、道隱が参学歴遊した行動範囲を見るに、はじめに一路、郷里の杭州から江西の仰山に到っているようであるが、『業識団』には仰山のほかに江西の禅刹を巡った形跡が存していない。おそらく祖欽の示寂した後、道隱は江西・湖南の禅刹に留まることなく、当時、禅の中心地であった浙江・江蘇・福建などの禅刹を巡って掛搭遍参をなしていたようである。

江蘇では、蘇州において府治東北の万寿報恩光孝禅寺と呉県西北七里の虎丘山雲巖禅寺と呉県西北の承天能仁禅寺（双峨寺）を訪れているが、万寿寺は十刹第四位であり、虎丘山（虎邱山）は十刹第九位であり、能仁寺は甲刹（諸山）に列している。また鎮江においては丹徒県西北七里の金山龍遊禅寺を訪れているが、金山（浮玉山）も甲刹に列している。さらに建康（南京）においては天寧禅寺と上元県西二里の石頭山清凉禅寺（広慧寺）を訪れているが、清凉寺も甲刹に列している。

浙江では、杭州において銭塘県西の中天竺万寿永祚禅寺と

北山景德靈隱禪寺や、余杭県西北五〇里の径山能仁興聖万寿禪寺を訪れているが、それぞれ径山は五山第一位、靈隱寺は五山第二位、中天竺寺は十刹第一位に列する名刹である。さらに臨安県西五〇里の西天目山と東天目山を訪れているが、とくに道隱は法兄の高峰原妙が開創した西天目蓮華峰の大覚禪寺などにかなり留まったのであろう。明州（慶元路）においては昌国県（昌国州）の東海上に位置する普陀山（補陀洛迦山）と鄞県東南の天童山景德禪寺を訪れているが、普陀山には観音宝陀禪寺をはじめ観世音菩薩の霊場があり、天童山は五山第三位の名刹として名高い。

福建では福州において侯官県西一八〇里の雪峰山崇聖禪寺と侯官県西一五里の怡山西禪寺（長慶院）を訪れ、また侯官県北の昇山玄沙禪院（教中崇報禪寺）に存したと見られる玄沙塔を巡っている。雪峰山は青原下の雪峰義存（真覺大師、八二二—九〇八）を開山とする福州随一の名刹であり、当時は十刹第七位に列している。また玄沙塔とは義存の高弟である玄沙師備（宗一大師、八三五—九〇八）の墓塔にほかならない。

おそらく道隱はこれらの名刹を巡って参禅掛搭し、また多くの禅者と交遊し、あるいは蔵主や首座などといった禅寺の職位を歴任して研鑽に努めていたのであろう。その目立たぬ三〇年にも及ぶ愚のごとき魯のごとき道隱の遍参には禅者としてきわめて真摯なものを感ずるのである。このように『業

識団』一卷は道隱の来日以前の活動を知る上で貴重なものであるが、それとともに当時の中国禅林の消息を窺う上でも興味深い内容を含んでいる。

来日と建長寺住持

東渡…文保二年東渡、住_二淨智・建長二大利_一。

延宝…元応初年、浮_レ杯東来。副元帥平高時、延主_二建長_一。

本朝…聞_二此方風_一、元応初年、浮_レ杯東渡。副元帥平高時、喜迎

住_二建長_一。叢規嚴整、七衆崇信。

稽疑…太元第八主仁宗帝延祐五年戊午歲東渡、当_二花園院文保

二年_一也。住_二淨智・建長二大利_一。

道隱は中国禅林に在って久しい研鑽をなし、大利などにも住持することなく年齢を重ねていたようであるが、やがて自らの生涯の最後を飾るかのごとく遠く日本への渡航に踏み切っている。

ところで、道隱は無準師範の法孫に当たっているが、初期の日本禅林の形成期において師範の門流が果たした影響は絶大なものが存している。すなわち、師範の法嗣としては、元庵普寧（宗覚禅師、一一九七—一二七六）・無学祖元（仏光国師、一二二六—一二八六）・了然法明（弘章、？—一三〇八？）らの中国僧（法明は高麗僧）が来日しており、また東福円爾（聖一国師、一二〇二—一二八〇）・性才法心（性西とも、一二八九？—

一二七三・妙見堂道祐(一二〇一—一二五六)ら多くの日本僧が入宋してその禅風を日本に伝えている。道隱はその師範の法孫に当たる禅者であり、蒙古襲来(元寇)の後しばらく中断していた日本僧の中国への渡航すなわち入元参学がしだいに活発化していく時期に、その流れを再び日本に持ち込んでいくわけである。

道隱が来日する以前に日本に赴いた元僧としては、早くに曹源派の一山一寧(一山国師、一二四七—一三二七)と松源派の西礪子曇(大通禅師、一二四九—一三〇六)らが存しており、ついで曹洞宗宏智派の東明慧日らが続いている。彼らの日本禅林での活躍のさまを伝え聞いか道隱もまた日本に渡航する決意を固めたのではなからうか。

ところで、道隱が日本に到った時期に関しては二説が存しているようである。すなわち、『東渡諸祖伝』『二十四流稽疑』『諸宗儀範』『関東五山記』などによれば、道隱の来日は文保二年(一二三二)のこととされているが、『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』『扶桑五山記』『鎌倉五山記』などによれば、その翌年の元応元年(一二三九)であったとされている。いったい、この二説の中でその何れが妥当なのであろうか。

この点について注目すべきは、大慧派の中巖円月(仏種慧濟禅師、一二〇〇—一二三五)が『中巖和尚自歴譜』において、

(文保)二年戊午、予十九歳、起_二円覚_一到_二博多_一、欲_レ出_二江南_一。

綱司不_レ許_レ上_レ舶而帰。夏在京之万寿絶崖和尚会下。冬永平義雲、畧通_二洞宗語言_一。是歳、靈山和尚觀国、韶石門同帰朝。

という記事を残していることであらう。これによれば、円月は明確に道隱の来日を文保二年のことであったと記しているわけであり、このとき道隱に随伴するかたちで石門韶という日本僧が同じく帰国していることが知られる。石門韶についてはその嗣承などが定かでないが、円月があえてその名を記しているのであるから、石門韶は円月と何らかの関わりが存した禅者であったのかも知れない。道隱が来日する因縁については明確ではないが、あるいは帰国する日本僧の石門韶に誘われるかたちで日本へ赴いたのかも知れない。

道隱の来日に際して鎌倉幕府や北条得宗家などから具体的な招請が存したことを示すような史料は存しておらず、地方の有力武士による招請が存したとも断定できない。この点、『中巖和尚自歴譜』には道隱の来日について「観国」という表現を用いているが、観国とは国土を觀て回る觀光の意味であるから、この表現によるかぎり、道隱は個人的な興味から来日を目指したもののようである。あるいは中国禅林での自らの接化の限界を知り、新たに禅風挙揚の新天地を日本に求めたのであろうか。『本朝高僧伝』ではその点を「此の方の風を聞き」と記しているから、これによっても道隱は日本における禅の隆盛を風聞して来日していることにならう。

ところで、『東渡諸祖伝』や『二十四流稽疑』によれば、道隱は来日した後、はじめに鎌倉山之内の金峰山浄智禅寺に住持した事になっている。浄智寺は開山が破庵派の兀庵普寧で、請待開山が松源派の大休正念（仏源禅師、一二一五—一二八九）であり、準開山が普寧の高弟である南州宏海（真応禅師、？—一三〇三）となっており、開基は北条宗政（一二五三—一二八一）とその子で第一〇代執権となった北条師時（道覚、一二七五—一三二一）とされている。

ところが、果たして道隱がこの浄智寺に具体的に住持したか否かについては実際のところ定かでない。道隱が浄智寺に住持したことを伝える史料がほかに見られず、また現在の浄智寺世代にも道隱の名が存しないのであって、道隱が浄智寺に晋山したのか否かは明確でない。

その後、道隱は鎌倉随一の名刹として知られる巨福山建長興国禅寺に入院開堂することになる。建長寺はいうまでもなく松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆（大覚禅師、一二三—一二七八）を開山とし、第五代執権の北条時頼（最明寺道崇、一二二七—一二六三）が開基となっている。ちなみに円月の『中巖和尚自歴譜』には、

後醍醐天皇、元応元年己未、春辞永平、歸鎌倉、参浄妙玉山和尚不契。再覲東明和尚於建長掛搭。同十月、東明和尚退、靈山和尚住建長、朝夕入室参問。以下曾在円覚相識、見

異愛、常作頌多称賞。二年庚申、冬住羽州、為救阿姉・阿甥難。是歳、南山和尚遷建長。

という記事が存している。もともと東明慧日の子飼いの門人であった円月は、文保二年の冬に越前（福井県）の吉祥山永平寺に赴いて永平下寂円派の義雲（一二五三—一二三三）に就いて同じく曹洞宗旨を究めており、冬安居を終えてか元応元年の春に永平寺を辞して鎌倉に帰っている。はじめ稻荷山浄妙禅寺に掛搭して大覚派の玉山徳璇（仏覚禅師、一二五五—一三三四）に参じたが契わず、再び建長寺の東明慧日の門を叩いて掛搭している。ところが、建長寺では一〇月に住持の交代があつて慧日が退院し、新たに道隱が新命住持に迎えられたというのである。この記事によって、道隱が建長寺に住持したのが具体的に元応元年一〇月であつたことが判明するわけであり、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』によれば、このとき道隱を建長寺住持に招いたのは北条得宗家の第九代執権（副元帥）の北条高時（相模太郎、一三〇三—一三三三）であつたと記されている。

『中巖和尚自歴譜』によれば、円月は引きつづき建長寺に留まって朝夕に道隱の室に入り、問答商量を交わしたとされる。とくに「曾て円覚に在りて相識るを以て異愛せられ、常に頌を作して多く称賛す」とあるから、道隱はそれまで円覚寺に寓居していたものらしく、すでに以前から円月が円覚

寺山内の道隱を訪ねて面識があり、このため建長寺においても道隱は常に円月の力量を称賛して多くの偈頌を作って与えたとされる。日本語に通じていなかった道隱としては、問答商量ではなく、偈頌によって日本僧と接していくしかなかったであろう。

円月が建長寺の道隱の席下に在ったのは元応二年冬までのことであり、まもなく姉や甥の難を救うために道隱に下を乞暇し、出羽(山形県・秋田県)へと旅立っている。その同じ年の暮れに道隱は建長寺の住持を退いたものらしく、聖一派の南山土雲(一二五四—一三三五)が新たに入院している。『南山和尚語録』『南山和尚住相州巨福山建長禪寺語録』には「師於三元応二年臘月廿六日入寺」とあるから、土雲は元応二年一月二六日に建長寺に陞住していることが知られる。

ところで、『扶桑五山記』三「建長寺住持位次」によれば、十八、靈山禾上、諱道隱。諡弘惠禪師、嗣雪岩。元応元年来朝。正中二乙丑三月二日寂。寿七十一。塔于正受菴。頌曰、還源歌、還源歌、還源一咲脱娑婆、哩々囉。

と記されており、道隱は建長寺第一八世として入寺したときとされる。ただし、『関東五山記』「相模州小坂郡鎌倉府山内県巨福山建長興國禪寺」では道隱を「当山十九世」と記しており、第一九世という説も存している。この点、『禅学大辞典』「日本禅宗各派本山世代表」などによれば、現今の建長寺の

世代表では道隱は第一九世に列せられている。

『本朝高僧伝』には道隱の建長寺における活動として「叢規は嚴整にして、七衆、崇信す」と記されているから、道隱が建長寺に在ってかなり嚴格かつ整然とした叢林の規矩を行じ、七衆がその徳を慕って帰崇したことを伝えている。七衆とは比丘・比丘尼・式叉摩那・沙弥・沙弥尼・優婆塞・優婆夷のことであるから、ここでは単に多くの道俗の意であろう。おそらく道隱は元代の禅宗叢林の清規に則ったかたちで建長寺に集った道俗らを接得したのであろう。

夢窓疎石との交遊

東渡

延宝：夢窓石訪次、師曰、趙州無字如何商量。窓曰、万里一条

鉄。師曰、不是不是。窓曰、頼通和尚不是。師即大笑。

本朝：夢窓石公、在三浦泊船菴、往復酬唱、動経信宿矣。

稽疑

ところで、道隱が建長寺の住持である頃に、夢窓派祖の夢窓疎石(木納叟・夢窓正覚心宗普濟国師、一二七五—一三五二)が道隱と交友を持ったことが知られている。疎石は仏光派の高峰頭日(仏国国師、一二四一—一三二六)の高弟であり、後には七朝の帝師と尊称されて、その門流はやがて夢窓派として中世五山派の主流をなしていくことになる。当時、疎石はいま

だ出世以前であり、下総（栃木県）那須の東山雲巖禪寺への住院の招請を固辞して元応元年（一三一九）の夏に相模（神奈川県）三浦に到り、横須賀に泊船庵を構えて居住している。その翌年の元応二年（一三二〇）二月に疎石は建長寺に赴いて道隱に相見し、互いに道交を温めている。

『延宝伝燈録』によれば、建長寺を訪れた疎石に対して、道隱は「趙州無字、如何んが商量す」と尋ねている。「趙州無字」とはすでに述べたごとくかつて道隱自身が師の雪巖祖欽より与えられた古則公案であり、道隱としてはこの古則によつて疎石の境界を推し量ろうとしたのであろう。これに対して疎石は「万里一条鉄」と答えているが、万里一条鉄とは万里の間を一条の鉄をもって貫く意で、平等一色の堅固な世界のことであり、ここでは無字（平等辺）の一法究尽を示している。道隱は疎石の答えを「不是、不是」と退けているが、これは無字の一色辺に滞ることを諫めた意であらう。ついで疎石が「頼いに和尚の不是に通ず」と述べると、道隱は即座に大笑したとされる。疎石は危うく平等面のみ陥るところを道隱によつて救われたことを告げるのであり、道隱はそんな疎石の力量に満足して大笑していることにならう。

これに対して『本朝高僧伝』では、疎石が相模三浦の泊船庵に在った折りに、両者は互いに往来して商量問答を交わし合ったことを伝えているが、交わされた問答の内容について

は何ら記していない。ただし、道隱自らが泊船庵に向いたことを伝えており、信宿すなわち二晩にわたり泊船庵の疎石の下で宿泊したことを記しているのは注目される。

ところで、こうした点は実際に『夢窓正覚心宗普濟国師語録』巻下に付される「天竜開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜」において、

後醍醐天皇元応元年己未、（中略）夏終抵三浦、留横洲建泊船庵。来扣者甚多、愈杜絶焉。（中略）二年庚申、師四十六歳、二月、赴齋覚海請。帰路因便訪建長靈山和尚。山纔見来便問、趙州無字意旨如何。師曰、万里一条鉄。山曰、不是不是。師曰、頼通和尚不是。山休去。師便帰。次日有明鑿師姑參靈山。山与法語一篇、其中有推讓師之語、且曰、你但參夢窓好。凡有學者来參靈山、皆指令見師。而云、我於此方言語不通、你去參夢窓。山又訪師来三浦菴、終日共語而帰。師以偈謝云、世上浮榮属貴家、窮栖羸得飽煙霞、春光今日添和氣、海岸枯椿也放花。〈酬酢問答語、多載語録中〉。元亨元年辛酉、師四十七歳、泊船庵後山巔在海中。師於其上建一塔、以海印浮圖為額。師之設心、蓋欲舟船往来人皆得行觀、乃至海中鱗介之類游泳塔影之下者並得結緣華藏海印三昧之中也。

と記されており、その間の事情がさらに詳しく知られる。これによれば、疎石が三浦半島の横洲すなわち横須賀に到って泊船庵を建立して居住した時期は、具体的に元応元年の解夏

(七月一五日)の後であつて、実際には秋に入つての時期であつたことが判明する。元応二年二月に疎石は檀信の覚海円成尼の設齋に赴いているが、その帰路に建長寺に道隱を訪ねているわけである。ちなみに円成尼とは安達氏の出身で、第九代執権の北条貞時(一二七一—一三二一)の夫人であり、北条高時の生母にほかならない。

このとき疎石は自ら新たな来日僧として高時の帰依の下に建長寺に活動を開始した道隱を訪ねているわけであり、先の『延宝伝燈録』に載る両者の問答は、実はこのときに建長寺にてなされたものであつたことが判明する。

さらに興味深いのは、疎石が泊船庵に帰つた翌日に、師姑(尼僧の尊称)の明鑒尼という人が道隱に参じ、このとき道隱は法語一篇を明鑒尼に与えたとされる。その法語の中に疎石を高く推譲する語句があり、明鑒尼に対して「你、但だ夢窓に参ずるが好し」と指示してあつたという。しかも、さらに疎石の年譜には、

凡そ学者の来りて靈山に参ずること有れば、皆な指して師に見えしむ。而して云く、「我れ此の方の言語に通ぜず、你、去りて夢窓に参ぜよ」と。

とあるから、道隱はおよそ修行者が自らのところにやって来ると、ほとんど泊船庵の疎石に参見することを指示していたものらしい。その理由して、道隱は自ら日本語に通じていな

いことを挙げており、ことばの障碍が禅の接化に大きな影響を与えてしまうのを自覚していたことが知られる。来日後わずか数年のできごとであるから、この頃に道隱はことばの限界に打ち当たり、かなり中国語のみによる接化に苦勞し、その限界を肌で感じていたことが窺われる。おそらく道隱は平生は中国語で説法し、わずかに片言の日本語を交わす程度で、各個人に対する接化には漢文の法語を与えるのを常としていたのであろう。道隱がこうして疎石の禅を高く評価したことは、その後の疎石の立場をいやが上にも世間から注目せしめたはずであり、独り隠遁を樂しむつもり疎石はしだいに詰めかける学人の応対に追われるようになったものと推測される。

疎石の『夢窓正覚心宗普濟国師語録』卷下「偈頌」には、

謝_レ円覚靈山和尚見_レ訪_三三浦菴居_一。

世上浮榮属_二貴家_一、窮栖贏得飽_二煙霞_一、春光今日添_二和氣_一、海岸枯椿也放_レ花。

豎_レ拳消息我罔_レ借、不_レ累_三瑞峯牙齒寒_一、菴外潮平門限濶、莫_レ言水浅泊_レ船難。

という偈頌が伝えられている。これは道隱が三浦の泊船庵を訪れた際に、疎石がその勞を謝した作にはかならない。道隱の肩書きが「円覚」とあるから、後に述べるようにすでに道隱はこのとき建長寺から瑞鹿山(瑞峰)の円覚寺に遷住してい

たことが知られる。時期は春であり、三浦の海岸に椿が咲き出す頃、疎石は太平洋を目前にした泊船庵での悠々自適の閑居を楽しんでいる。世俗の榮華に染まらず、美しい自然の風光を満喫する疎石の心情が察せられよう。

同じく『夢窓正覚心宗普濟国師語録』卷下「偈頌」には、

靈山和尚夏末寄_レ偈次、韻為_レ答。

禁足不_レ離_三三浦境_一、無辺利海遍_レ經過、意通_三方外_一山川絶、情隔_三目前_一雲霧多。一榻蕭条忘_三歳月_一、四簷鬱密蓋_三藤蘿_一、少林妙旨非_レ干_レ我、誰管如之与若何。

という偈頌も伝えられている。これは道隱が夏末すなわち解制罷（七月一五日以降）に偈頌を寄せてきたのに対して、韻を踏んでこれに応えたものである。ここでも疎石は三浦の自然の風光の中で禁足安居する消息を語り、後に帝師と称えられる時期などとは相違するきわめて自由な雰囲気をも道隱に告げている。

ちなみに疎石は元亨元年（一二三二）に泊船庵の後山の海に突き出した巔に三層の海印塔を建立している。それは船舶にて往来する人々や海中の魚介類たちのために目印となるようにというものであり、いわば衆生済度の願いを込めた華嚴海印三昧の結縁であったという。おそらく道隱は疎石のそんな温かな人柄を高く評価し、いづれ疎石が自らの禅風を遺憾なく發揮し、将来に大きく活躍するであろうことを予想してい

たのではなからうか。なお道隱と疎石の交遊に関しては、佐々木容道「夢窓詩雜感―泊船庵―」（『禅文化』第一六四号、平成九年春）などの論考が存している。

円覚寺での活動

東渡

延宝

本朝

稽疑

建長寺に在って化導を敷いていた道隱は、まもなく同じ鎌倉山之内の瑞鹿山円覚興聖禅寺に住持し、第一二世となっていることが知られている。ただ、如何なる事情によるものか道隱が円覚寺に住持したことを燈史・僧伝はなぜか全く伝えていない。しかしながら、『扶桑五山記』四「円覚寺住持位次」や『五山記考異』「瑞鹿山円覚興聖禅寺住持位次」によれば、円覚寺第一二世に道隱の名が明確に存することから、道隱が円覚寺に住持していることは疑いない。

道隱が円覚寺住持として活動したことを伝える史料として、現在、円覚寺内には北条高時が故北条貞時の後室安達氏すなわち先の円成尼らとともに元亨三年（一二三三）の貞時十三年忌に際して、円覚寺の法堂や建長寺の華嚴塔を新造し、各種の仏事を修したときの長文の古文書が残されている。従

来、この文書は久しく寺内で「法華八講」と呼ばれていたものであるが、『鎌倉市史』『史料編第二』の「円覚寺文書」第六九において「北条貞時十三年忌供養記」として活字化されている。この「北条貞時十三年忌供養記」が撰された当時は道隱が導師として重要な役を演じている。そこでこの記録から道隱に関わる部分を順次に抽出し、その活躍のさまを窺ってみることにしたい。

すなわち、「北条貞時十三年忌供養記」の冒頭に近い部分によれば、円覚寺の法堂を新造するのに際して、

額事、当寺長老靈山被_レ撰申、拈華堂・曇華堂・直指堂也。被_レ商_二量諸寺長老、東勝寺士雲曰、拈花堂尤好。建長寺東明曰、曇華堂殊勝。寿福寺惠輪曰、直指堂可_レ宜。以_二兩三輩之意見_一、被_レ申_二談別駕、直指堂其義相心歎、云々。仍治定_二于此義_一。近衛前大臣兼平公、被_レ書_レ之。

と記されており、はじめに法堂の額名が詮議されたことが知られる。住持の道隱を中心に候補に挙げられた三種の名号を協議選定することになり、このとき東勝寺の住持であった聖一派の南山士雲は拈華堂を、建長寺の住持であった宏智派の東明慧日は曇華堂を、寿福寺の住持であった仏光派の雲屋惠輪（仏地禪師、一二四八—一三三二）は直指堂をそれぞれ相応しいとして進言している。ときに別駕の安達時顯（秋田城介・延

明、？—一三三三）の決裁で直指堂の名が採用され、前大臣の近衛兼平すなわち鷹司兼平（称念院覚理、一二二八—一二九四）が額を揮毫したとされるが、ここにいう兼平とは時期的にみて近衛家平（岡本殿、一二八二—一三二四）の誤りであろうと推測される。まもなく円覚寺では元亨二年一月二二日に木作始があり、元亨三年二月一日に立柱がなされている。

さらに「北条貞時十三年忌供養記」にはつづいて、

同七月十日、当寺両班事、有_二其沙汰、自_二官方_一被_レ請_レ之。前堂首座浄妙寺祖輝長老、都寺智貴都管、維那正雄書記。其余者、以_二耆旧次第_一、被_レ重請_二畢。当年法堂新造御仏事連続之間、所_レ被_レ清撰_二也。同十月廿日、於_二仏日庵無畏堂_一、有_二経供養_一。課_二当寺僧衆内三十一人_一、妙法蓮花経一部八卷、開結心、阿等経各一卷、被_レ頓_二写_一之。今月下旬至_二廿六日_一、其中間依_レ無_二日次_一、以_二吉日_一、今日被_レ始行_二御追善_一。陞座御導師、当寺長老靈山。請僧十口、惠約西堂・惠曇首座・聡祥首座・仁泰首座・元安都寺・至源都寺・玄畊都寺・斎璉都寺・志玄書記・文昌蔵主。

とあるから、七月一〇日に円覚寺では来るべき大法要に向けて両班の交代があり、とりわけ前堂首座には浄妙寺住持であった大覚派の独照祖輝（真覚禪師、一二六二—一三三五）が迎えられる。さらに一〇月二〇日には貞時の霊屋である仏日庵無畏堂において経供養があり、いよいよ追善法事が始まっている。導師は道隱であり、請僧の中には仏光派の孤雲惠約

と聖一派の竺山至源と夢窓派の無極志玄（仏慈禪師、一二八二—一三五九）と大覚派の桂峰文昌らの名が見られる。また、このとき道隱は導師として砂金五〇両と銀剣の布施を得ており、請僧らもそれぞれ砂金五両を布施されている。二一日に法堂の上棟があり、同じ日に建長寺でも貞時後室の安達氏が東明慧日を導師として塔婆供養がなされている。

さらに一〇月二二日には北条氏被官の長崎高綱（三郎左衛門尉・入道円喜、？—一三三三）が無畏堂において道隱を導師として円覚寺・建長寺・寿福寺・浄智寺・禅興寺の五ヶ寺から一〇〇〇人の僧を集めて追善の仏事を挙行し、南山土雲が書写した『金剛経』を開板したものが転読されている。また翌日二三日に貞時後室の安達氏が舍利殿において道隱を導師に請して「如法経十種供養」の追善を厳修している。

ついで諸宗の学僧によって「法華八講」の大法要がなされた後、二六日に法堂供養がなされており、貞時の画像を掛けた中で道隱が陞座説法し、諷経行道がなされている。「北条貞時十三年忌供養記」には、

御導師、当寺長老靈山。請僧、道生長老へ聖福寺・呪願・道頭長老へ大慶寺・明・祖輝長老へ浄妙寺・時首座・聡一長老へ万寿寺・妙準長老へ雲岩寺・惠南長老へ大慈寺・散花・徳

杲長老へ長勝寺・文岑長老へ東漸寺・智貴都寺・正雄維那。

とあるから、このとき諸山の長老が一同に円覚寺に会し、大

供養を遂行していることが知られる。そこには遠く筑前（福岡県）博多の安国山聖福禪寺の住持であった仏源派の鉄庵道生（本源禪師、一二六二—一三三二）の名が筆頭に存し、さらに浄妙寺の独照祖輝のほか、万寿寺の住持であった大覚派の喝巖聡一と那須雲巖寺の住持であった仏光派の太平妙準（仏心禪師、一二七六—一三三七）と長勝寺の住持であった日峰徳杲と東漸寺の住持であった大覚派の象先文岑（象外とも、一二七五—一三四二）などが請僧として赴いている。

ちなみに「北条貞時十三年忌供養記」にはさらにつづいて「御布施」として「導師」の項には、

錦被物一重・色々被物五重・白綾被物五重・裸物一へ染物十入之・錦横被へ掛蓮打枝・水精念珠へ掛椿打枝・砂金百両へ置銀折敷・銀剣一へ入錦袋・加布施御衣一領へ五重単・送物銭三百貫文。

とあるから、このとき道隱は導師として幕府より多くの品々を布施されていることが知られる。もちろん、これらの金品は道隱個人に布施されたものというより円覚寺住持の肩書きで導師を勤めたことに対する返礼であろう。

さらに「北条貞時十三年忌供養記」にはつづいて、

同日、於無畏堂有陞座御仏事。導師、長老靈山。請僧、明因寺思諦・円福寺聡愚・勝林寺妙湛・海会寺淳恵・妙環首座・惠堪首座・円恵都寺・監寺円証・円具副寺・円震副寺。

とあり、同じ日に無畏堂において導師の道隱が陞座仏事をなしており、請僧の中には仏光派の枢翁妙環（一二七三—一三五四）・大用惠堪（靈光禪師、一二六八—一三四七）や聖一派の可庵円惠（円光禪師、一二六九—一三四三）らのほかに、東明慧日の門人と見られる円証・円具・円震（南極円辰か）らの名が見られる。このときは導師道隱には砂金一〇〇両と銀劍が、また請僧たちには砂金各三〇両が送物としてそれぞれ布施されている。

ついで「北条貞時十三年忌供養記」には、

同夜、於_二無畏堂、長老有_二拈香、大方殿御仏事。其後諷經。其次於_二同堂_一陞座。左近大夫將監殿御分御仏事也。一切經転読供養也。去十二日開白、七ヶ日転読、今日有_二供養。御導師、南山和尚。請僧、祖満都寺・了猷都寺・敏泰首座・至弘都寺・義芳首座・禅鑿首座。

とあるから、同夜に貞時後室の安達氏が無畏堂において仏事をなし、長老の道隱は拈香して諷經の後に無畏堂にて陞座説法している。つづいて左近大夫將監殿すなわち北条泰家（法名は恵性）が施主となって七日間なされた一切經転読供養が満参となり、東勝寺の南山土雲が導師となって供養がなされている。

以上のごとく、北条貞時の十三回忌の仏事は幕府の一大行事として執り行われており、ときあたかも円覚寺の住持であ

った道隱は導師としてきわめて重要な立場にあったわけであり、この時期の道隱はまさに鎌倉禅林の中心的な存在として活動せざるを得なかったことが窺われる。

また同じく『鎌倉市史』「史料編第二」の「円覚寺文書」第六〇によれば、円覚寺第一〇世の東明慧日が「円覚寺領文書目録」という円覚寺の寺領文書目録を作成しているが、慧日の在判は正和四年（一二三五）一月二十四日と文保元年（一二三七）一月二七日になされている。それに対してさらに聖一派の南山土雲が元応二年（一二三〇）一月二五日に追加して花押を押し、さらに元亨四年（一二三四）二月一〇日に道隱が花押を署判している。先の大仏事がなされた元亨三年一月より四ヶ月あまりを経た時点で、なお道隱が円覚寺住持として化導を敷いていたことが判明するとともに、道隱が用いた花押が直筆で知られる点でも貴重なものがある。

このほか、『禅林墨蹟拾遺』中国篇（六九）には三井同時庵蔵「達磨図賛」として、

壁觀老胡、口頭見戲、累及_二可祖_一、失_二一隻臂_一。

癸亥二月廿八日、円覚道隱揮手。

〔道隱〕方印（山型絵）方印

という道隱が賛した「慧可断臂図」が伝えられている。ここにいう癸亥は元亨三年のことであり、この年の二月二十八日に道隱は円覚寺住持として賛を付しているわけである。この画

像賛も実際に道隱ゆかりの墨蹟が残されている点で貴重なものがあり、道隱が用いた長方印なども具体的に知られるわけである。

さらに『秋澗泉和尚語録』巻中「大小仏事」に、

円覚靈山和尚請為雪岩和尚拈香。

大日本国相州円覚住持嗣法上足、伏値前任大宋国遠州仰山禪寺先師雪岩大和尚遠諱、今隣峰比丘某、熱香回向先供養現不現前三宝海、回其餘勲、莊嚴先師雪岩和尚報地者。伏惟、龍淵湛々深多少、水醮雪岩徹底寒、正脈通流終不止、朝宗東海鼓波瀾。欲窮源底來処遠、故郷入望天地寬、冤已有頭債有主、爐香一炷絶遮欄。

という仏事の拈香法語が伝えられている。これは仏源派の秋澗道泉（大法源禪師、一二六三—一三二三）が円覚寺の道隱に請せられてなした雪巖祖欽に対する拈香法語である。道泉は備中（岡山県）の人で、松源派（仏源派祖）の大休正念（仏源禪師、一二一五—一二八九）に法を嗣いでおり、晩年には鎌倉の龜谷山寿福金剛禪寺の住持を勤めている。道泉は元亨三年七月一日に六一歳で示寂していることから、その直前に道隱に頼まれて寿福寺から隣峰の円覚寺に赴いて祖欽の命日に拈香法語を述べているわけである。

また、この頃に破庵派（鏡堂派）の無雲義天（一二九〇—一三六七）がやはり鎌倉に到って道隱に参学している。『統群書

類從』第九輯下（卷二三五）の「無雲天禪師行実」には、

師諱義天、字無雲。正応三年庚寅、降誕于京師之賀茂氏、国人十八代之孫也。自幼師事建仁大円禪師。十七歳之秋、喪大円、聿就靈龕前剃髮。然後依明蒙山於南禅、山嘉司業局。職滿遊相陽、円覚隱靈山、以侍者之任招之。師僅逾弱冠之日、沿視滄海、而直入大元。其志專在安置大円靈座于蓮峯之巷而已。太白岫雲外、親書安牌法語、付師以為証矣。遂歸本邦、再寓円覚。

とあり、この記事は僧伝・燈史にも受け継がれている。すなわち、『扶桑禅林僧宝伝』巻六「無雲天禪師伝」には、

禅師、諱義天、字無雲。出京師賀茂氏。自幼師事建仁鏡堂円和尚。年十七、円入寂。遂就靈龕前剃落。依蒙山明公于南禅、侍湯藥。参靈山隱和尚于円覚。既而入支那、謁雲外岫和尚、特為其師円公求安位牌法語。遂歸、再寓円覚。とあり、『延宝伝燈録』巻一八「京兆南禅無雲義天禪師」の章にも、

京兆南禅無雲義天禪師、城北賀茂氏子、厥先世掌太史。師幼侍鏡堂。十七堂順世、師就靈龕前剃髮得度、侍規菴円・蒙山明、杖錫往相州、参靈山隱于建長。大舸南遊、謁雲外岫于天童、探洞下旨、特為鏡堂和尚求安牌法語。巡歴諸山、飽參而歸、寓洛之東山。

と記され、また『本朝高僧伝』巻三一「京兆南禅寺沙門義天伝」にも、

釈義天、字無雲。賀茂氏。山城州人。厥先世掌太史。天穉歲、師事建仁鏡堂円和尚。年十七、円公順世。遂就靈龜剃髮。初侍規菴円禪師于南禪、次依蒙山明公。後杖錫遊相州、參靈山隱和尚于建長。既而入支那、謁雲外岫和尚于天童、且為本師円和尚求安牌法語。去見諸知識、歸本朝、寓洛之東山。

として載せられている。何れも義天が鎌倉にて道隱に学んだことを伝えるものである。そもそも義天は京都の賀茂氏の出身であり、幼くして京都東山の建仁寺に上って破庵派の鏡堂覚円（大円禪師、一二四四—一三〇六）に師事している。覚円は天童山の環溪惟一（一二〇二—一二八一）の高弟であり、法叔の無学祖元（字は子元、仏光国師、一二二六—一二八六）に随従して来日した中国禅僧であり、道隱にとっても法従兄に当たっている。

義天は徳治元年（一二三〇）に一七歳で覚円の靈龜の前で最後の小師として剃髮得度しており、その後は南禪寺において仏光派の規庵祖円（南院国師、一二六一—一三三三）やその法嗣の蒙山智明（一二七七一—一三六六）に参学して湯葉侍者などの職位を勤めている。ただし、智明が南禪寺に住持するのは遙か後のことであるから、仮に智明に参学したとしてもそれは南禪寺住持としての智明ではなく、おそらく南禪寺に在って規円の高弟として化導を補佐していた智明であろう。

職位を勤め終わった後、義天は相模へと下り、鎌倉にて靈山道隱に参随しているわけであるが、「無雲天禪師行実」と『扶桑禅林僧宝伝』ではその場所を円覚寺とし、『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』ではこれを建長寺であったと記している。道隱が建長寺に在ったのはかなり短期間に限られているわけであり、状況的には「無雲天禪師行実」や『扶桑禅林僧宝伝』が伝える円覚寺というのが妥当なように思われ、それも道隱が円覚寺に入院して間もない時期ではなかったかと推測される。道隱は席下に到った義天を侍者の役職に招いたとされる。

その後、義天は入元して明州鄞県東の天童山景德禅寺に到り、曹洞宗宏智派の雲外雲岫に謁して曹洞宗旨を究め、その一方で本師鏡堂覚円のために安牌法語を求めている。雲岫が示寂するのが元の泰定元年（一三三四）八月二二日のことであるから、義天が円覚寺の道隱の席下を去ったのも、当然ながらこれよりかなり前ということになる。道隱は来日以前に天童山の雲岫に参学した経験が存しているから、義天にも雲岫への参学を勧めたものと思われる。

『延宝伝燈録』卷一八「京兆南禅無雲義天禅師」の章に「師博辯優才、提唱頌古、亡失不存」とあるなど、義天にはまとまった語録が存していない。駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』や『国書総目録』卷七などによれば、東京大学史

料編纂所に『無雲和尚語録』（『無雲天禪師語録』とも）一卷が所蔵されていることになっているが、実際には所蔵されておらず、その所在が不明であるのは惜しまれる。

ところで、すでに触れたごとく『扶桑五山記』四「円覚寺住持位次」には道隱の円覚寺住持に関して、

十二、靈山木上、諱道隱。嗣雪岩欽。元亨四日三月。仏恵禪師。

と記されており、『五山記考異』「瑞鹿山円覚興聖禪寺住持位次」においても、

第十二、仏恵禪師。嗣法雪岩欽。諱道隱。号靈山。元亨四年三月。

と伝えられている。いずれも道隱が円覚寺第一二世となったことを伝えるものであるが、そこには「元亨四年三月」という日付が付されている。ここにいう元亨四年（一二三四）三月という日付が道隱の円覚寺入寺の年月を伝えているものではないことはすでに述べてきた事実によって明らかであろう。では、元亨四年三月とは道隱にとって如何なる日であったのか。少なくとも道隱は元亨四年二月までは円覚寺の住持であったことは確定している。推測するに、道隱が円覚寺住持を退院した年時こそ元亨四年三月であったのではなからうか。先の大法要を無事に円成させた直後、道隱は年齢的なものからか円覚寺の住持を退いているものと察せられる。

正受庵の創建

東渡

延宝…師胤正受菴於福山、為終焉地。

本朝…隱後於巨福山中、胤正受菴、為菟裘地。

稽疑

『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』によれば、道隱が建長寺山内に正受庵を開創して居住し、この庵を終焉の地と定められたことを伝えている。菟裘の地というのも隱棲の地の意味であり、生前に隱居したことを示している。正受庵への退閑が具体的にいづなされたのか、円覚寺を退いた直後か否かも明確ではないものの、おそらくは先のごとく元亨四年三月のことであろう。しかも道隱は円覚寺ではなく、それ以前の建長寺を退閑の地と定めているわけである。

すなわち、この点は『扶桑五山記』三「建長寺住持位次」の「諸塔」においても、

雪岩派、正受菴。靈山木上道隱、元応元來朝、大宋杭州人。諡仏恵禪師、嗣雪岩。

とあり、また『和漢禪刹次第』「相陽巨福山建長興國禪寺」の「諸塔」においても、

〈雪岩派〉正受菴。靈山和上、諱道隱。仏恵禪師、嗣雪岩。元応元來朝、大宋杭州人。

と記されている。これらによれば、正受庵は明確に建長寺山内に師匠の雪巖祖欽にちなんで雪巖派の塔頭として存していたことが知られる。一方、『鎌倉五山記』『相州小坂郡山内県巨福山建長興国禅寺』においても建長寺山内に存した四九の塔頭の一つとして、

正受庵仏慧禅師、諱道隱、号_ニ靈山。嗣_ニ法雪岩欽。杭州人。元応元年己未来朝。世寿七十一年。正中二年乙丑二月二日示寂。頌曰、還源歌、還源歌、還源一吹脱_ニ娑婆、哩々囉。揖雪へ客殿。

とあり、また『関東五山記』『相模州小坂郡鎌倉府山内県巨福山建長興国禅寺』にも、

正受庵仏恵禅師、諱道隱、字靈山。嗣_ニ雪岩。杭州人。文保二来朝。当山十九世。寿七十一。正中二乙丑二月二日寂。偈曰、還源歌、還源歌、還源一吹脱_ニ娑婆、哩々囉。揖雪へ客殿。

と記されている。これらによれば、さらに正受庵には揖雪と称された客殿なども存したことが知られる。道隱は終焉の計をなす退閑の庵室として正受庵を創建しているものであり、示寂して後は道隱の塔頭として後世に維持されたものである。

さらに『禅林墨蹟』『正編下』の二七によれば、東京国立博物館蔵「法語」として、

断_ニ三際_ニ超_ニ十地_ニ、脱_ニ羅籠_ニ碎_ニ窠_ニ旧。世先世間、到_ニ个般境界_ニ、方能辨_ニ己分由事_ニ。脱_ニ或未_ニ然、六祖問_ニ明上坐_ニ、不思善不思惡、正恁麼時、明上坐父母未生已前本来面目。明上坐、忽然大悟。

靈山道隱と『業識団』について(佐藤)

此則公案、流_ニ在叢林久矣。汝二六時只恁麼拳、忽然啞_レ口道着、親見_ニ明上坐・六祖_ニ、大執_レ手共行矣。行可、兼道可、可_レ成_ニ着衣・喫飯・麻三斤・乾屎_ニ。只麼墮_ニ世出世間_ニ。了事納僧。或有_ニ寸進_ニ、切来説話。是則証、不是則斂却。祝々。

乙丑年正月廿五日、靈山書(花押)

〔道隱〕方印 (山型図) 方印

という道隱が記した法語が伝えられている。乙丑は正中二年(一二三五)のことであり、道隱が示寂した年に当たっている。この墨蹟は道隱が日本禅林で記した貴重な法語であるが、具体的に誰に示したものは定かでない。ただ、住持地の肩書きなども存せず、时期的なことを考慮しても、すでに道隱は正受庵に隠閑していた時期に相当しよう。道隱は六祖慧能(盧行者・大鑑禅師、六三八―七二三)と蒙山慧明(道明・四品將軍)にちなむ「六祖不思善不思惡」の古則公案を拈提しており、文意が若干ながら明確でないものの、晩年に至るまで接化に邁進した道隱の姿が偲ばれよう。

示寂と後事

東渡…示寂、敕諡_ニ仏慧禅師_ニ。

延宝…正中二年三月二日、遘_レ病唱_レ偈曰、還源歌還源歌、還源一吹脱_ニ娑婆_ニ、哩々囉。唱畢坐蛻。寿七十有一。塔_ニ于本菴。敕諡_ニ仏慧禅師_ニ。

本朝…正中二年三月二日、唱_ニ遺偈_ニ曰、還源歌還源歌、還源一

吹脱_二娑婆、哩哩囉。 跏趺而化。 春秋七十有一。 敕諡_二弘

慧禪師_一。

稽疑_二示寂之後、敕諡_二弘慧禪師_一。 見_二東渡諸祖伝卷上_一、不_レ詳_二

師始終_一。

晩年を日本禪林にて過ごした道隱は、円覚寺の住持を退いてそれほど時期を経ずに正中二年（一二三二）三月二日に遺偈を書して示寂している。『東渡諸祖伝』などでは道隱の始終が詳らかでないとして示寂年時を伝えていないが、『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』では明確に示寂の年月日が記されている。とりわけ、『延宝伝燈録』には「病に遘うて」とあるから、道隱が何らかの病に罹り、それがもとで示寂したらしいことを伝えている。おそらく道隱は退隱中の正受庵において療養に努めたのであろうが、残念ながら薬湯の効果なく遷化を迎えたものと見られる。

ちなみに『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』などには、

還源歌、還源歌。 還源、一たび吹いて娑婆を脱す。 哩々囉。

という道隱の遺偈が伝えられている。還源とは源に還ることであり、生滅無常のこの世を去り、眞実寂靜の本元に帰る意である。源に還る歌を唱え、さらりと娑婆世界を脱した道隱の最期が偈ばれよう。最後に道隱は「哩々囉」と嘯いているが、哩々囉とは歌の調子を取って間に入れる合いの手の文句であり、そこに飄々として翻身した禅僧の生きざまが窺える

わけである。

『本朝高僧伝』によれば、道隱は遺偈を示した後、足を組んで結跏趺坐したまま遷化したとされ、『延宝伝燈録』でも坐脱したと記されている。坐禅のかたちのまま亡くなることは禅僧にとってもっとも相応しい最期ともいえよう。ときに道隱は世寿七一歳であったと記されているが、残念ながら法臘（坐夏）については明記されていない。ただ、状況的には法臘もすでに五〇余齢ほどには達していたものと推測される。道隱は南宋末期の宝祐三年（一二五五）に国都杭州に生まれ、文保二年（一二三二）に六四歳で来日し、日本に化導を敷くこととわずか八年にして正中二年に示寂していることになる。

ところで、道隱と同じ来日僧であった曹洞宗宏智派の東明慧日は、『東明和尚語録』「偈頌」において、

悼_二靈山和尚_一。

錯見_二当年小釈迦_一、一時蕩尽破_二生涯_一、却来_二海上_一春風外、火後重抛眼裏沙。

という道隱の示寂を悼む偈頌を残している。おそらくは建長寺正受庵に示寂した道隱の消息を聞いて慧日が直ちに追悼の偈を認めたのであろう。当年の小釈迦とは当代の仰山慧寂（小釈迦）の再来と称えられた雪巖祖欽のことを指しており、道隱が祖欽の席下で己我の見を徹底的に洗い清めたことを語っている。重ねて眼裏の沙を抛つとは、悟りに対するとりわ

れすら投げ捨てた道隱のありようを示すものであろう。

また、かつて道隱と交友を持った夢窓疎石も『夢窓正覚心宗普濟国師語録』巻下「仏祖賛」において、

靈山和尚。

胸無_二畦畛_一、眼蓋_二虚空_一、浮華不_二介視_一、枯淡為_二家風_一。仰山山下一点水墨、樛桑震旦兩処成龍。易_レ地震_二雷霆_一、龍淵通_二海東_一。没量化權賤不_レ賤、滅後舍利露_二靈蹤_一。

という道隱に対する祖賛を残している。疎石もまた道隱を仏祖として慕っていたものと見られ、道隱の示寂して後にその頂相に賛を付したのであろう。仰山の祖欽の席下で学んだ禅のありようを中国と日本の兩処で發揮したと評しており、疎石は道隱の立場を枯淡の家風と解している。浮華とは上辺ばかり華美で実のないことであり、道隱はそうしたものに厳として目をくれない清貧の人であったと述べている。

法嗣と門流

東渡：有_下賜_二号_一仏宗真悟禪師子介者、師得法上首也。

延宝

本朝

稽疑

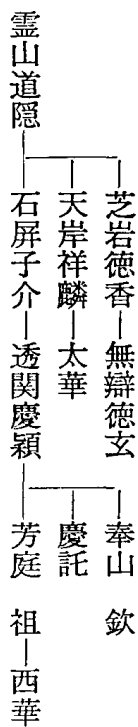
道隱の門流は後世に仏慧派または靈山派あるいは師の雪巖祖欽にちなんで雪巖派と称されて一家をなし、日本禅の二十

靈山道隱と『業識団』について（佐藤）

四流の一つに挙げられている。しかしながら、燈史・僧伝ではわずかに『東渡諸祖伝』のみが道隱の得法の上足として石屏子介（仏宗真悟禪師、？—一三八一）を挙げているにすぎない。

これに対して室町期に夢窓派の古篆周印（無癡）が編集した『仏祖宗派図』では「建長靈山道隱」の法嗣として「浄智芝岩徳香」「香積石屏子介」「寿福天岸祥麟」を挙げ、さらに徳香の法嗣として「寿福無辯徳玄」を載せている。また、江戸初期に妙心寺派の桂芳全久が編集した『正誤宗派図』四でも「建長靈山道隱」の法嗣として「防州香積石屏子介」「寿福天崖祥麟」「浄智芝岩徳香」を挙げ、さらに徳香の法嗣として「寿福無辯徳玄」を載せている。これらによる限り、道隱は日本禅林における八年ほどの活動の中でわずかに三人の法嗣を得たにすぎなかったことになる。

いま、これら道隱の系統を系譜によって示すならば、つぎのごとくになる。



このように門流の展開としてはきわめて限られたものであるが、以下、道隱の法嗣および門流の人々について若干の考察をなしておくことにしたい。

石屏子介は周防（山口県）の人と見られ、出家の後に関東の地に到って道隱に参じているらしい。北朝の康永元年（南朝の興国三年、一三四二）に入元した子介は大慧派の楚石梵琦（西斎老人・仏日普照慧辯禪師、一二九六—一三七〇）ら諸禪者に参禅している。帰国して後、子介ははじめ肥後（熊本県）に到って菊池武光（豊田十郎、？—一三七三）の帰依を受けて永徳寺を開いている。また周防守護の大内義弘（周防介、一三五六一—一四〇〇）を檀主として周防に上方山香積寺を開創し、また長門（山口県）に白牛山龍蔵寺を開創している。

上方山香積寺は開基を大内義弘として山口に建立された禅寺であり、子介は師の道隱を開山に勧請している。この寺は天文元年（一五三三）七月二五日に十刹位に列せられているが、後に曹洞宗に転じて山口市上宇野令の保寧山瑠璃光寺として現今に及んでいる。また龍蔵寺は山口県萩市に存しており、古く聖武天皇（七〇一—七五六、在位は七二四—七四九）の創建として華嚴宗の教寺であったとされるが、後に荒廃していたものらしい。応安年間（一三六八—一三七五）の末年に至って越智氏を開基とし、子介によって再興されて建長寺派に属したが、後に南禅寺派に転じて現今に及んでいる。かつて子介には京都嵯峨の靈龜山天龍資聖禅寺への請住の勅旨が降りたことがあり、『智覚普明国師語録』巻七「偈頌」の「寄香積石屏和尚「勸天龍請」」によれば、夢窓派の春屋妙葩（智

覚普明国師、一三二一—一三八八）が二偈を呈して勧請したものの、子介はついに辞讓して受けなかつたとされる。

子介が示寂したのは北朝の永徳元年（南朝の弘和元年、一三八一）とされ、仏宗真悟禅師と勅号されている。また子介の語録として『仏宗真悟禅師語』または『石屏録』一巻一冊が存している。『石屏録』一冊は『日本禅目』に触れられており、金閣寺所蔵と記されているが、いまでは不存のようである。『仏宗真悟禅師語』一冊は一に『仏宗真悟禅師語録』とも称され、門人の中岳が編したものであり、永正一〇年（一五二二）に受竺という人が写筆したものが大東急記念文庫に所蔵されている。

子介の法嗣である透閑慶頼は開基の大内盛見の帰依を受け、やはり山口に香山国清旌忠禅寺を開創しており、この寺も永禄五年（一五六二）六月一日に十刹に列している。この香山国清寺は一名を広利寺・雪舟寺と称され、後に山口市宮野の香山常栄寺として東福寺派に属して現今に及んでいる。

さらに駿河（静岡県）の青龍山長楽寺は道隱の法嗣の芝岩徳香が開創した禅寺であり、『扶桑五山記』二「日本禅院諸山座位次第事」によれば、

駿河州、青龍山長楽禅寺。開山芝岩禅師、諱徳香、嗣隱靈山。と記されており、後に諸山に列していることが知られる。この寺は藤枝市に存し、妙心寺派に属して現今に及んでいる。

徳香は鎌倉の浄智寺にも住持しており、その法嗣の無辯徳玄は鎌倉の寿福寺に住持している。また子介や徳香と同門の天崖祥麟も寿福寺に住持していることから、道隠の門流は鎌倉の寿福寺や浄智寺を中心に辛うじて余風を残していたことになろう。

また『建長寺史（末寺編）』『埼玉県第二部宗務支所』の「法雲寺」の箇所によれば、埼玉県秩父郡荒川村白久（古くは武蔵秩父郡白久村）の瑞龍山法雲寺がやはり道隠を開山としており、

開山・開基 開山靈山道隠仏慧禪師 開基不詳

開創年月 室町時代 元亨三年

と記され、鎌倉末期の元亨三年（一三三三）に道隠が開山となつて開創されたことになっている。開山の道隠の後しばらくの間、法雲寺が如何なる変遷をなしたのかは定かでないが、法雲寺本尊の如意輪観世音菩薩像は道隠が持仏として来日のみぎりに捧持して来たものとされている。

語録と著述

道隠には『業識団』一卷とは別に、もと語録として『靈山和尚語録』二巻が存したものらしい。駒沢大学図書館編『新纂禅籍目録』によれば、

靈山和尚語録 ②二巻 ③靈山道隠 ④応永三三年 ⑥扶桑禅

靈山道隠と『業識団』について（佐藤）

目

とあり、『扶桑禅林書目』を引いて、道隠におそらく応永三年（一四二六）書写と見られる『靈山和尚語録』二巻の存在を伝えている。実際に『扶桑禅林書目』『語録』にも、

靈山和尚。諱道隠。元人。嗣法雪岩祖欽。二巻。

と記されているから、編者である京都建仁寺第三五七世の天章慈英（一八二四—一八七六）が活躍した幕末から明治初期の頃には、いまだ『靈山和尚語録』二巻が現存していたのであろうか。一方、同じく『新纂禅籍目録』によれば、

仏慧禪師語録 ③靈山道隠 ⑥日仏全統刊目

という記載も存している。『日仏全統刊目』とは『日本仏教全書統刊予定書目』のことであり、そこに『仏慧禪師語録』が予定されていたわけであるから、やはり当時も道隠の語録が残っていたと解するべきであろう。『靈山和尚語録』と『仏慧禪師語録』は単なる表題の相違で同一の語録であったものと見られ、その内容については定かでないもの、おそらく道隠が日本禅林でなした上堂・小参・法語・偈頌などをまとめたものであろうから、日本での消息を知るには貴重な文献であったはずである。『靈山和尚語録』がいまも何れかに残存している可能性は存するものの、現在のところ、寡聞にしてその伝存を確認し得ず、散逸が惜しまれてならない。

また別に『靈山和尚法語』という短編の一法語が『国文東

方仏教叢書』第二輯「法語上」に収められて道隱のものとして
れているが、これは実際には道隱の法語ではなく、ほぼ同時
代の大応派（大徳寺派）の徹翁義亨（大祖正眼禪師、一二九五—
一三六九）の仮名混じり法語であるらしいことから、ここでは
考察の対象にはならない。

ところで、『延宝伝燈録』巻四「相州建長靈山道隱禪師」
の章にはつぎのごとき上堂・偈頌や問答商量を載せている。

- (1) 師初在宋国某寺、冬節乘扈曰、黄面瞿曇、於平々陸地、起
激洪濤、没溺大地衆生、了無出期、克由耐。後嘉禾有
跛脚阿師、頗有子柄僧氣息道、我當時若見、一棒打殺与
狗子喫、貴天下太平。俊哉。雖然如是、又遲八刻。
被他做成伎倆、沿流至今未能勦絶。今夜、乘扈上座、
未免借上方拄杖、尽情掃蕩去也。画一画曰、四十九年、
三百余会、揺唇鼓舌、腐爛葛藤、一時掃蕩、淨尽了也。直
得、天清地寧、人和道合、洪鈞布煖、線日延長、衢童鼓舞、
野老謳歌、共樂昇平之化。脱或未然、一九与二九、相喚
不出手。復拳慈明掲榜公案、頌曰、不是唐言非梵字、
十字街頭狗脚踪、枯木堂中有佳士、老饕何処著羞容。
(2) 有僧問曰、覺經大光明藏義。師以偈答曰、万德光明藏、声
前子細看、寬時函法界、窄置一毫端。靈焰騰金地、真風
弘翠巒、衆生迷滞甚、方便誘多般。
(3) 頌、独脱無依曰、齒豁頭童一老身、更於何処定功勳、天
堂淨域狐狸窟、十聖三賢驢馬羣。

(4) 看藏經曰、閱徧琅函珠有類、研窮奧旨玉生瑕、霞條
未解双瞳活、杳々長空雁字斜。

(5) 礼玄沙塔曰、脚尖築破嶺頭時、大地山河血一池、今日春
風重漏泄、牡丹華間紫薔薇。

(6) 拙翁和尚拳兜率三関問曰、撥艸參玄、只因見性、上座性
作麼生。師以偈答曰、黑似漆明如日、取不得舍不得、万
靈千聖覩無門、金剛座下鉄崑崙。

(7) 問、識得自性、脱得生死、眼光落地時、作麼生脱。答、行
便行坐便坐、一物無何規矩、掉臂江湖轉一回、豆華初放夕
陽微。

(8) 問、脱得生死便知去処、四大分離向甚処去。答、没地
頭有方所、見無見空寰宇、怒雷轟碎五須弥、玉蟾照竭滄
溟水。

同じく『延宝伝燈録』巻三八「頌古」には「建長靈山隱禪
師五首」として、

(9) 黄檗掌沙弥。只将麈尾行当慈悲、痛掌連腮劈面揮、徹骨
痛時三際断、大唐天子太平基。

(10) 裴相国捧仏安名。息念停機捧起時、柴金光燭五須弥、何
当特地安名字、一点瑕玳生白圭。

(11) 李翱見薬山。詞源浩浩无边表、包括三才貫古今、天有
雲兮瓶有水、如何随指又沈吟。

(12) 唐莊宗見興化。鎮固定邦無倆宝、光華燁々遍坤維、君王
信手輕拈出、趙壁燕金賤似泥。

(13) 涅槃。摩胸告衆涅槃時、那日誰分詭譎詞、一個法身周法

界、古今毫髪不_レ曾移。

という五首の頌古を載せている。また同じく『延宝伝燈録』
卷三九「偈讚」には「建長靈山隱禪師五首」として「和_二帰
休子山居_一へ五首」という表題で、

(14) 誰執_二人間造化權_一、均霑_二万有_一、総天然、風梳_二松鬢_一、茎茎直、

日鑄_二若錢_一、箇箇円、菊吐_二金英_一、含_二玉露_一、雁横_二錦字_一、破_二蒼

烟_一、余生不_レ属_二陰陽_一、槁木形骸又一年。

采辱昇沈総不_レ関、忘_レ機情緒自間間、探_レ玄不_レ用窮_三際_一、

辨_レ見何須_レ拳_二八還_一、朝去暮回双白鶴、春濃秋瘦四囲山、有

時擊_レ壤間歌詠、万仞崖前古檜間。

松陰竹罽独徘徊、休_レ道求_レ真不_レ用_レ媒、煩惱海中波浪息、性

空籬上覚華開、従_レ教秋鬢緇_二春蠶_一、一_三任山房長_二雨苔_一、老倒

瞿曇機未_レ息、卻云_レ轉_レ物即如来。

人間是事俱抛下、水際雲根悦_二道容_一、凜凜氷壺無_二朕跡_一、輝輝

心鑑絶_二磨礪_一、三玄戈甲当_二荆棘_一、五位君臣要_二路松_一、胸臆未_レ

諳_三二八九_一、尋_レ師訪_レ道莫_二匆匆_一。

銷_二槃玄微_一、契_二祖翁_一、驅_レ耕奪_レ食起_二玄宗_一、敲_レ空有_レ響龜毛

扠、擊_レ木無_レ声兎角筇、風落_二断崖_一、雲片片、月生_二寒嶠_一、水溶

溶、河沙妙徳俱方寸、心径莫_レ教_二菩提_一封。

という五首の七言律詩の偈頌を載せている。さらに『本朝高
僧伝』卷二四「相州建長寺沙門道隱伝」にも、

(15) 隱_二題_一、僧血_二書華嚴_一、感_レ舍利_一、百城烟水螭螟眼、五十三

人驢馬羣、額有_二円珠_一、皮有_レ血、針鋒毫末定_二功勳_一。

靈山道隱と『業識団』について(佐藤)

(16) 題_二血書法華經_一曰、転_レ男成_レ仏夢中夢、衣裏明珠泥彈丸、血
脈貫通親徹_レ句、紅蓮華綻紫毫端。

(17) 血書金剛經曰、三心帰_レ一_一非_レ心、十指何須痛著_レ針、山雨
乍収秋日薄、丹震散_レ彩落_二風林_一。

という『華嚴経』『法華経』『金剛経』の血書に対する三首
の七言絶句を伝えている。一方、『東渡諸祖伝』卷上「宋靈
山隱禪師伝」と『二十四流稽疑』卷下「第十五東渡宋靈山隱
禪師畧伝」においては、

(15) 嘗_二瀝_一指上鮮丹、書_二襍華藏海之文_一、満_二八十一軸_一。頌曰、百
城煙水螭螟眼、五十三人驢馬羣、額有_二円珠_一、皮有_レ血、鍼鋒
毫末定_二功勳_一。

(16) 亦墨書云、一真法界一言無、鉄硯磨穿道転迂、彈指声中双眼
活、蜂房螻穴総昆盧。

(17) 又贊_二善財_一云、頓忘_二三際_一百城沈、五十三人一寸心、錯去_二
覚城東際_一日、登山渡_レ水幾沈吟。

という三首の偈頌が載せられている。以上のごとく燈史・僧
伝によれば、道隱には一つの乗拈法語と一八首二二偈の作が
伝えられていることになる。

ところが実際には、これらは何れも『業識団』からの引用
であって、『靈山和尚語録』などからの引用は全く見られな
いことから、少なくとも江戸期の元師蛮(独師、一六二六―
一七一〇)らはすでに『靈山和尚語録』を閲覧する機会はなか
ったことになろう。そして、また同時に『業識団』一卷は江

戸期には道隱に関する唯一の資料として知られていたことが判明するわけである。

後世の評価

『本朝高僧伝』巻二四「相州建長寺沙門道隱伝」において妙心寺派の正元師蛮はつぎのような賛を残している。

賛曰、隱公觀光此国、抛名藍八年矣。覓其提唱、亡失不見。辞偈一首、載鎌倉五山記。又在宋之日雲遊行卷、号業識団、体裁新鮮。伝中所載題血書華嚴經等是也。然或者之言曰、禅師住淨智・建仁、牧衆之暇、自瀝指血、書華嚴八十軸矣。夫隱公、無準的孫、雪巖高弟、正欲秉臨濟本分鍵、以接得此方学人。豈煩糲糊聖經、而慣朴実頭漢耶。以己眼之暗、鈍置明眼宗師、其過不少、看者辨焉。

これによれば、道隱が觀光のために日本に赴いたこと、日本での活動が八年あまりに過ぎなかったことが述べられている。また師蛮は道隱の提唱のことばなどを採し求めたようであるが、結局のところ、失われて見ることができなかったとし、わずかに『鎌倉五山記』に載る辞偈一首を得たことを伝えている。しかも師蛮は『業識団』を在宋の日の雲遊行巻としてとらえており、実際には在元中の作が中心ではあるものの、明確に中国での作であることを理解していた点、『業識団』の全文を閲覧する機会に恵まれていたことになろう。

『東渡諸祖伝』巻上「宋靈山隱禅師伝」において黄檗宗の高泉性澈（曇華道人・大円広慧国師、一六三三—一六九五）は「賛曰」として、

毘盧華藏海、深不能窮、広莫可測。靈山遠祖、牧衆之暇、等間把一毛錐子、一攪攪翻、了無涓滴。然後、從無涓滴処、湧出万丈洪波。直得、無尺蘇迷楼、無量日月輪、一時顯現。且道、是禅耶、是教耶。

という賛を載せており、これはそのまま『二十四流稽疑』巻下「第十五東渡宋靈山隱禅師畧伝」にも「賛」として載せられている。ここでは道隱が華嚴の教えを究め、教禅一致的な立場を貫いたことを語るものである。これらはともに江戸期における道隱に対する評価として注目してよいであろう。

『業識団』の形状および構成

すでに述べたごとく靈山道隱の詩文集である『業識団』一巻一冊には、国立国会図書館内閣文庫所蔵本（以下、内閣文庫本と略称）と京都大学付属図書館所蔵本（以下、京都大学本と略称）という二種の筆写本が存している。しかも『業識団』はわずかにこの内閣文庫本と京都大学本という二種の写本が伝えられるのみの貴重本であって、いまのところ、ほかに刊本や写本の存在は知られていないようである。そこで以下、『業識団』の形状および構成について、この二本を比較検討

しつつ若干の書誌学的な考察をなしておきたい。

内閣文庫本『業識団』一卷は、内閣文庫の蔵書番号が和書分類番号の一七七九五号、冊数一冊で、二〇五函の三架（五八）となっており、右下に「釈家三ノ一」という紙が貼られている。筆写本として伝えられているが、明確な筆写年代などもまったく記されていない。表紙左端上部に「靈山和尚業識団」と表題が書かれているが、内題は本文第一丁表の冒頭に「業識団」と記されている。

また京都大学本『業識団』一卷は、京都大学図書館の蔵書番号が一三六四三一号、冊数一冊で、蔵二四〇一三となっている。やはり筆写本として伝えられるが、明確な筆写年代なども記されていない。表紙左端上部に「隱靈山業識団 全」と表題が書かれているが、内題は本文第一丁表の冒頭に「業識団」と記され、右に朱字で「隱靈山」と付されている。

道隱自身が『靈山和尚業識団』あるいは『隱靈山業識団』と名づけるわけではないから、正式名称は両本の内題のごとく『業識団』とすべきであり、後代に作者の名前を明確にするために『靈山和尚業識団』あるいは『隱靈山業識団』と表題されるようになったものであろう。ここでは書誌学上の原則に従って、以下、内題の『業識団』をもって本書を称することにした。

内閣文庫本の表紙は深草色ないし草緑色であり、冊子の寸

法は縦が二七・二センチ、横の上部が一九センチ、下部が一八・七センチとなっており、装丁は袋綴じである。丁数は全体で三五丁であるが、一丁表から三三丁裏までが本文となっており、三四丁(乙二)が跋で、三五丁(乙二)が「宋靈山隱禅師伝」である。また行間字数については、本文と伝は毎半葉一〇行二〇字となっており、跋のみは半葉に五行一〇字で記されている。また各袋綴じの柱の部分には上部に「業識団」の文字があり、下部に丁数が記入されている。また跋文と伝記の柱の部分には「業識団」の文字の下部にそれぞれ「跋乙」「伝乙」の文字が見られる。

一方、京都大学本の表紙は薄茶色であり、冊子の寸法は縦が二七・四センチ、横が一九・六センチとなっており、装丁は袋綴じである。体裁は内閣文庫本とほとんど同じで本文が毎半葉一〇行二〇字、跋のみ半葉に五行一〇字で記され、柱の部分の下部に丁数が記されている。ただ、内閣文庫本の末尾に存する「宋靈山隱禅師伝」は載せられておらず、京都大学本が依った原本が古いものであった可能性が存する。

『業識団』の内容を吟味してみると、すべて道隱が来日以前になした作であることが知られ、日本に赴いて以降になした作はまったく含まれていないことが判明する。その面では『業識団』は南宋代末期から元代中期に中国叢林に生きた道隱個人の足跡を伝える貴重な文献資料であるとともに、当

時の中国禅林の状況の一端を知る上でも多くの興味深い事実を今日に提供する詩文集ということになる。そのためなのか『業識団』は結局のところ上村観光編『五山文学全集』や玉村竹二編『五山文学新集』など日本中世禅林文学の叢書などにも収められることなく終わっている。

では、道隱は自らの詩文集を何故に『業識団』と命名したのか、そもそも「業識団」とは如何なる意味のことばなのであろうか。いうまでもなく業識とは宿業としての妄心であり、迷いの世界に流転してきたことよって起こる凡夫の意識作用を意味することばである。善業や悪業によってもたらされた報いとしての識、宿業の因によって感得した心識のことである。とくに『大乘起信論』では五意の一つで、無明のために不覚妄想心が起動することを業識と称している。

ただ、道隱が自らの詩文集に「業識団」という書名を選んだ直接の由来はいま少し特別の事情が存したものでらしい。すでに述べたごとく道隱は若くして仰山の雪巖祖欽の席下で「趙州無字」の古則を参究しているが、「業識団」というのはその因縁にちなむものようである。すなわち、『趙州真際禅師語録』巻上には、

問、狗子還有_二仏性_一也無。師云、無。学云、上至_二諸仏_一、下及_二蝗子_一、皆有_二仏性_一、狗子為_二什麼_一無。師云、為_二伊有_一業識性_二

在_上。

として、有名な趙州從諗の「趙州無字」の原形の間答が載せられている。この古則では狗子の仏性を課題として衆生の業識性が取り上げられているのであって、おそらく道隱も祖欽の席下で自らの持つ妄心としての業識のあり方を実地に参究したものと見られる。また道隱は『業識団』の「龐老無生話」において「一火無明業識団」という表現を用いており、無明の業識団ということばが見い出せる。団とはものの集まりとか塊のことであるから、業識団となれば業識の固まりを意味しよう。道隱としては、心識を勞して遍参歴遊した自らの修行辦道の過程を一個の業識団として捕らえ、その間になした詩文を業識の吐露したものとして一纏めにし、『業識団』と称しているわけである。

『業識団』には道隱自らが記した年記や序文などが存しておらず、わずかに跋文として「延祐己未春、徑山老叟希陵題」という法兄の虚谷希陵が元の延祐六年（一二二九）に記した題跋が存している。延祐六年といえは道隱が日本へ赴いた翌年に当たっており、仮に道隱が『業識団』を持参して来日したとすれば来日年時に微妙なずれが出てしまう。また道隱が来日して後に希陵が跋を付したとすると、『業識団』が日本にもたらされたのはその後のこととなる。

少なくとも『業識団』の原形が成立したのは道隱が来日する延祐五年か希陵が跋文を付した延祐六年のときのことと見

てよからう。おそらく道隱が自ら記した詩文集を日本に向かう直前に希陵に呈示し、親しく跋文を請うたものである。道隱は来日に際してそれまでの詩文をまとめた『業識団』を持参し得たはずであろうが、来日後に希陵の跋文を得たものが日本にもたらされた可能性も存しよう。

さらに『業識団』が果たして日本禅林で刊行されたものか、単に写本のままで伝えられたものかは定かでない。両写本とも文字はまったくの白文であって、返り点や送り仮名などは存せず、朱墨で句点のみが付されている。とりわけ内閣文庫本では偈頌などの韻文に関して韻を踏む部分の文字の右にやはり朱墨で○印が付されており、また地名・山名・寺名などには字句の右に朱で一線が引かれ、人名には字句の中央に朱で一線が引かれ、書名には字句の中央に朱で二重の線が引かれ、年号には字句の左に朱で二重の線が引かれている。

おそらく道隱が中国から持参したものを字句を整えて浄書したものが両写本の原本となっているのであろう。ただ、すでに述べたごとく『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』などの燈史・僧伝には明確に『業識団』から引用された詩句などが多いことは注目すべきで、江戸期には何らかのかたちでほかに『業識団』が写本としてか閲覧可能な場所に残されていたと見なければならぬ。あるいは内閣文庫本・京都大学本ともに行数や字数が正確に記されている点、内閣文庫本の各袋

綴じの柱部分の上部にある「業識団」の文字、両写本の柱部分の下部に存する丁数の記入、跋文がともに倍角で記されている点などからすれば、内閣文庫本や京都大学本の基になった原本が刊本であった可能性も存しよう。また内閣文庫本・京都大学本ともに別本との校訂をなしているようである。

内閣文庫本の筆跡は能筆な一名の手でなされているが、明確な筆写の記述などが見られないため、筆写年代については定かでない。ただ、巻末に付される「宋靈山隱禅師伝」が黄檗宗の高泉性激が編した『東渡諸祖伝』より引用されていることから、内閣文庫本が江戸中期以降に「宋靈山隱禅師伝」を付載して筆写されたものであることは疑いない。また京都大学本も明確な筆写の記述が存しておらず、筆写年代も定かでないが、巻末には「宋靈山隱禅師伝」が載せられていない。

しかも残念なことには両写本とも識語などがまったく記されておらず、内閣文庫あるいは京都大学に所蔵されるに至るまで、如何なる伝写の過程を経ってきたのか、はたまた所蔵者がどのように変遷して来たのか、などについても定かにし得ない。

内閣文庫本については、わずかにその手がかりとして、巻首第一丁表の内題の右下に「浅草文庫」と「和学講談所」の印が捺押されており、また上の右(内題の上)に「書籍館印」

があり、その左に「日本政府図書」の印が存し、下部中央に「内閣文庫」の印が存している。さらに本文第二一丁左の下と、巻末の「宋靈山隱禪師伝」の終わりにも、それぞれ「内閣文庫」の印が押されている。

これらの印を総合すると、内閣文庫本はもともと湯島聖堂（昌平坂学問所）の和学講談所の旧蔵書であったことが知られる。おそらく塙保己一（水母子・温故堂、一七四六—一八二一）が『群書類従』や『続群書類従』を編纂するのの際して、門人の誰かが何れかの原本から筆写したものであろう。あるいは建長寺・円覚寺など鎌倉の五山禅林などに所蔵されていたものが原本であったものと見られるが、定かなことは分からない。また巻末に付される「宋靈山隱禪師伝」などは著者の事跡を明確にするためにこのとき初めて追加されたものではないか。明治時代に入って湯島の書籍館が和学講談所の書物を継承した際に、『業識団』もここに移され、さらに浅草文庫を経て国立国会図書館の内閣文庫に所蔵されたのであろう。

一方、京都大学本については、巻首第一丁表の内題の上に「一三六四三一、大正三・二・五」という黒印があり、内題の下部に「株式会社藏経書院印」という朱印、同じく第一丁表の中央上部に「京都帝国大学図書之印」という朱印が存している。京都大学本は藏経本の一つとなっており、もともと

藏経書院が大藏経編纂に際して集めた典籍の一点にほかならない。如何なる原本からの筆写かは定かでないが、大正三年（一九一四）二月五日に正式に他の藏経本とともに京都大学図書館（もとは京都帝国大学図書館）に寄贈されているわけである。

いずれにせよ、内閣文庫本と京都大学本がそれぞれ原本から筆写されてより内閣文庫や京都大学図書館に所蔵されるに至るまでには稀有なる事情が存したはずであろうが、それらの詳細な変遷の過程は定かでない。

そこで、以下、内閣文庫本を翻刻し、これを京都大学本で校訂して、『業識団』一卷を公にすることにしたい。

凡例

一、左記は内閣文庫本『業識団』一巻の翻刻であり、これに京都大学本の相違箇所を右横に（ ）で対校するものである。

一、翻刻に当たっては、改行箇所や空白部分などは原本に準ずるが、紙面の都合上、丁分けや頁分けなどは明記しないものとする。

一、翻刻に当たっては、原則として原本通りそのまま再現するが、略字体・別字体・俗字体など筆写体文字や異体文字の場合、ときに活字用正字に改めたものもある。

一、すでに本書の筆写段階で虫食いなどで不明とされて空白となっている部分は、一字ならば□で示し、二字以上の場合は文字数に準じて□□で示すことにする。

一、句読点は原本に一応は示されているが、妥当と見られるものを補って付した部分も存する。

一、原文は白文であるが、判読上、私なりに妥当と見られる返り点その他を付記しておく。

一、内閣文庫本には偈頌の箇所などに韻を踏んでいる場合、文字の右脇に○印が付されているが、ここでは煩鎖にわたるので割愛する。

一、原文で区分が曖昧な己・巳・巳の区別などは、文意により適切な文字を筆者なりに選定しておく。

一、踊り字「々」に関しては、状況によりもとの字に改めた場合がある。

(隠録山)
靈山和尚業識団

業識團

布袋浴_レ江圖。

戲携_三諸子_二下_二寒汀_一、毫末論量未_二十成_一。生鐵脊梁開_二活眼_一、
年々移在_二柳梢春_一。

血書華嚴經。

十指頭邊血脉通、百城烟水一針鋒。毗盧樓閣無_二關鑰_一、霞彩
重々散_二曉風_一。

平江萬壽南洲和尚三題。

目前不_レ物。

金錘刮_二盡無明膜_一、銀海光搖掩_二夕暉_一。百種千般礙_二膺物_一、洞
前玄_韻發_二真機_一。

聲前一曲。

溪邊石女斂_レ眉歌、六合雲凝水不_レ波。穀漏內無_二微細識_一、耳
聞雖_レ少眼聞多。

獨脫無依。

齒豁頭童一老身、更於_二何處_一定_二功勳_一。天堂淨域狐狸窟、十
聖三賢驢馬群。

洞宗自得和尚三題、和_二末宗和尚_韻。

坐禪得_レ妙。

蘿龕危坐鬢如_レ銀、靈燭潛輝物會_レ神。妙轉一機群象外、佛非_二
吾道_一母非_レ親。

用中得_レ妙。

頂門眼活鎔_二今古_一、肘後符靈不_レ借_レ功。兔角削_レ筇敲_二紫鳳_一、
龜毛結_レ網打_二獰龍_一。

躰_體中得_レ妙。

靈源湛寂躰含_レ虛、塵劫來々一翳無。漏_二轉玉壺_一天似_レ洗、含_レ
輝老兔上_二珊瑚_一。

大愚接_二臨濟_一嗣_二黃檗_一。

破_レ規削_レ矩掣_二風顛_一、老骨難_レ禁肋下拳。黃檗汝師宜_二善事_一、
休_二將_二管見_一辱_中高安_上。

睦州接_二雲門_一嗣_二雪峯_一。

退_レ身成_レ跛進無_レ門、落賺方窮萬法根。蒲履價廉難_二共住_一、終
歸_二象骨_一續_二芳塵_一。

浮山接_二投子_一嗣_二大陽_一。

鞋衣囑付賣油翁、陽廣山前續_二正宗_一。玄_韻密付空劫妙、君臣
慶會屬功々。

道吾指_二夾山_一見_二船子_一。

笑設_二機心_一植_二禍根_一、惹時容易脫無_レ因。鯨濤吼拍朱涇岸、不_二
是愁_レ人也斷魂_一。

讚_二布袋_一。

脊梁活眼泄_二天機_一、內院何曾放_二你歸_一。七十二汀江上路、破_レ
規削_レ矩引_二群兒_一。

雲峰指_二黃龍_一見_二慈明_一。

當_レ機拈出雲門棒、授_二受津涎_一當_二下空_一。和_レ氣一團親_二父子_一、

□□怒枕打雲峯。

血書華嚴經、有舍利。

百城烟水螭螟眼、五十三人驢馬群。額有圓珠皮有血、針鋒毫末定功勳。

又。

毘盧性海渺無垠、滴血顆珠俱是塵。八表風清新雨霽、照虛紅焰海棠春。

澤山和尚墨書華嚴經。

一眞法界一言無、鐵硯磨穿道轉迂。彈指聲中雙眼活、蜂房蟻穴總毘盧。

善財。

頓忘三際百城沈、五十三人一寸心、錯在覺城東際日、登山度水幾沈吟。

血書法華經。

轉男成佛夢中□、衣裡明珠泥彈丸。血脉貫通親徹句、紅蓮花綻紫毫端。

血書金剛經。

三心歸一一非心。十指何須痛着針。^(著)山雨乍收秋月薄、丹霞散彩落楓林。

看藏經。

閱遍琅函珠有類、研窮奧旨玉生瑕。^(雙)霞條未解雙瞳活、杳々長空鴈字斜。

又。

經是到家大驛路、得路便行行到家。得路不行空得路、三年贏得眼頭花。

讚達磨。

連拋香餌釣獰龍、月皎江澄龍睡濃。一計不成慚滿面、飄々折葦逐西風。

送人禮觀音。

七尺單前不樹功、處々秉志禮圓通。潮音古洞觀音現、盧扁難醫翳一重。

禮辭仰山再來塔。

蘿龕三透禮慈顏、欲別無言展步難。隊々野猿聲切切、溥々玉露淚潛々。

寄平江萬壽南洲老和尚。

黃金萬鎰鑄崑崙、動着三千海嶽昏。十相尙虧難縱逸、夢魂長遶北山門。

寄中竺三元叟和尚。

招提是處可安身、惟有中峰入夢頻。不_三是生來多癖病、兜_レ玄無_レ地_レ着_レ聲塵。^(著)

又。

霽色澄々物會神、十分圓頓墮功勳。天荒地老憑誰委、寶掌危々坐_三雲_一。

送友人_下之江西禮祖。

無明膜盡翳花鎔、五眼光搖祖席空。十八灘頭倍惆悵、黃金骸骨草茸々。

靈隱起三方丈閣。

規繩一髮不_レ容_レ差、畫棟雕欄接_ニ彩霞、末世人無_ニ童子志、朱扉半掩夕陽斜。

禮_ニ玄沙塔。

脚尖築破嶺頭時、大地山河血一池。今日春風重漏泄、杜_□花閒_レ恐落_ニ鶻字、可_レ考_ニ別本_レ紫薔薇。

重粧_レ佛。

老胡一_{大著}火着_ニ新衣、整々慈容凜々威。着_著一隻衲僧相見眼、黃金添_レ彩裹_ニ黃泥。

送_ニ人住院。

額有_ニ圓珠_一眼有_レ筋、祖庭顛仆只憑_レ君。今時雲水多乾_レ慧、輒莫_ニ當_レ機易肯_レ人。

送_ニ人禮_ニ文殊。

太平無_レ象一閑身、忍見_ニ芒鞋_一曉問_レ津。五色雲中現_ニ獅子_一、金錘難_レ翳扶_ニ晴塵。

寄_ニ徑山鑑西堂。

九年面壁蛇行_レ毒、六載居_レ山豹變_レ紋。一等奸_レ邪輕捉敗、戲衫不_レ着_ニ住_ニ雲根。

又。

半簷曦色杏花風、世外高人睡正濃。少室正傳今欲_レ斷、莫_レ嫌_ニ

破_レ夢五更鐘。

普陀求_ニ觀音現_一、印_ニ藏經_一歸_ニ五臺。

頓忘_ニ岐路_一觀_ニ慈顏_一、又在_ニ鯨濤雪浪間_一。破履踏_翻吳越路、葛藤_{□□}牽_ニ臺山。

寄_ニ天童雲外和尚。

異苗繁茂固_ニ靈根_一、一裔連延三百春。今日遠孫門戶別、捧頭敲出玉麒麟。

行解雙弘道自尊、江湖志士合_ニ評論_一。新豐古曲翻_ニ新調_一、_{□□}普_レ天人共聞。

玲瓏巖畔月徘徊、不_ニ是雞人報_レ曉時_一。九五位空金殿靜、四臣無_レ地_レ肅_ニ容儀_一。

龍泉號。

不_下將_ニ頭角_一眩_ニ江湖_上、淵宅潛藏志似_レ愚。鬣々鱗々有_ニ波浪_一、未_レ應_ニ容易沃_ニ焦枯_一。

賀_ニ金山後堂首座。

百非四句說_ニ天宮_一、識_ニ墮翮_一々蝶夢中。掉覺起來空_ニ兩眼_一、水花雲葉擁_ニ鰲峰_一。

無外號、天台教超兄。

摩訶止觀躰眞常、方寸冥符即大方。眼底寥寥空_ニ八表_一、更於_ニ何處_一覓_ニ封疆。

無照號。

一點靈光吞_ニ有象_一、休_下將_ニ妄想_一辱_ニ宗風_上。龍驤虎驟諸尊宿、

折合還歸炭庫中。

和承天禹溪和尚臘月三十日雪韻^(韻)。

歲月交結頭底日、着然於此不瞞頂。撒開兩手臨風看、
刹海三千玉一團。

無聞號。

焦桐掛壁五音備、鐵磬罷敲清韻金^(韻全)。一種是聲々垢外、不下
於塵世一落中兜玄^上。

雪樵號。

攪空玉屑千山白、獺獠衝風過嶺南。斫倒菩提一株樹、和
枝和葉一肩擔。

葬父母。

真空有穴力安排、曠劫雙親一處理。凍雨乍收山路滑、何爲
赤脚^(著)着芒鞋。

送人遊山。

杖頭有眼分縑素、眞照無塵混妙明。況是春風三月裡、大
方獨步稱幽情^(稱)。

起鐘樓一鑄鐘。

繩墨裡求非志士、揮斤碎範見全提。蒲牢吼月華夷窄、鷓
鴒吞空玉宇低。

禪會圖。

黃檗掌沙彌。

只將羸行當慈悲、痛掌連腮劈面揮。徹骨痛時三際斷、

靈山道隱と『業識團』について(佐藤)

大唐天子太平基。

國一見唐代宗。

亭々古貌鬢絲々、好箇大唐天子師。別有^(著)一機恢聖化、着然
不在四威儀。

趙州不下禪床。

端坐柴床接至尊、當機密旨孰評論。趙州古佛歸眞寂、
流落叢林示後昆。

裴相國捧佛安名。

息念停機捧起時、紫金光燭五須彌。何當特地安名字、一
點瑕玼生白圭。

唐文宗嗜蛤蜊。

信心纔舉萬緣空、一點悲心瑞九重。漏蛤帶腥含實相、更
於何處不圓通。

龐老無生活。

男兒不婚女不嫁、一火無明業識團。各逞己能說難易、分
明父子自相瞞。

靈照女奪席。

越樣梳雲巧畫眉、恃嬌無力步遲々。砒霜肝膽蜂糖口、惑
亂爺々一日午時。

龐大倚鋤而化。

父母歸眞妹亦歸。難禁後夜唳猿哀。拈來七尺鋤頭柄、大
涅槃門一擊開。

李翺見ニ藥山一。

詞源浩浩無ニ邊表。包ニ括ニ才ニ貫ニ古今。天有ニ雲兮瓶有ニ水、
如何隨ニ指又沈吟。

唐莊宗見ニ興化一。

鎮ニ國定レ邦無ニ價寶、光華燁々遍ニ坤維。君王信ニ手輕拈出、
趙壁燕金賤似レ泥。

和ニ温日觀懷ニ淨土一。

劔樹刃光欺ニ日月、鑊湯擲浪響ニ春雷。好修ニ片善ニ歸ニ安養、
蓮沼白蓮華半開。

塵緣擾々無ニ時了、切々思々憶ニ故郷。行樹七重金鸞、蓮臺
九品玉鴛鴦。

明修暗度計ニ高强、名利醉人蝸角爭。清泰國無ニ如許事、仙童
玉女侍ニ閑行。

讚ニ達磨一。

九年面壁蛇行レ毒、皮髓分將鳩落レ毛。打ニ落齒牙ニ并中レ毒、
惡人惡報髮無レ差。

送ニ人遊ニ台鴈一。

肩聳ニ玉樓ニ方廣寺、眼橫ニ銀海ニ大龍湫。不レ知ニ那裏乖ニ毫髮、
一握ニ烏藤ニ萬里秋。

悼ニ雪峰首座一。

燒作ニ一堆灰ニ了也、蟪蛄拍レ翅蓋ニ須彌。春回ニ雪嶺ニ花如レ錦、
正是眉閒血濺時。

送ニ後堂首座住院一。

兜率宮中曾說法、一眞潛運顯ニ玄機。龜毛細結漫天網、要レ打ニ
冲霄ニ白鳳兒。

福州西禪柏堂和尚五題。

松風度曲。

虬枝細葉鼓ニ濤聲、靜夜神聞分外清。一曲新豐歌得レ妙、未
明ニ微旨ニ不堪レ聽。

蘿窓閱レ教。

疎櫺引レ蔓葉凝レ雲、暑有ニ涼風ニ臘有レ春。慢解ニ霞條ニ舒ニ玉
軸、照レ心明レ理遠ニ芳塵。

忘ニ緣清坐。

石床危坐萬緣無、六處虛凝瑩不レ磨。誰墮ニ功助ニ求ニ勝嗣、神
駒金鐙役脩レ途。

見ニ色明レ心。

乖レ崖古木穉容瘦、皴碧輕紅春少年。色即是心心即色、不レ須ニ
深雪立ニ庭前。

聞レ聲悟レ道。

吼レ月蒲牢百尺簾、漱レ清雙澗一床琴。聲塵築ニ破孃生耳、物
々頭々演ニ妙音。

術士蘭坡求。

未レ坼ニ胚胎ニ一線痕、擬下將ニ禍福ニ嫁何人。驀然道得十成句、
蘭蓴香騰九畹春。

做衣待詔。

金針穴細線芒微、綿密工夫只自知。一領七斤衫子妙、從教六合凍雲垂。

寄金山首座。

睦州遷化五百載、覓個高人(商)繼踵無。大徹堂中第一座、心枯眼活道相如。

出山相。

飢寒逼迫苦難停、足躡雲梯下翠層。鳳質龍章消削盡、瘦皮包裹骨稜々。

二祖。

雪深三尺凍難忍、斷臂安心未寧。血濺空庭收不得、至今遍界散風腥。

六祖。

胝褻兩肩柴擔重、鞞開雙脚踏春多。許多生受自招得、潑衣賴孟直幾何。

魚籃婦。

痛念群生正眼昏、手提錦鯉入紅塵。遼天高價無人委、浙々西風起自蘋。

馬郎婦。

賣弄嬌姿誘念經、願如滄海世難評。馬郎聲誦如流水、一字分明(情)一片清。

觀音。

惠爺雙手手遍(體)躡、惠爺雙眼眼通身。誠心至孝多靈驗、一埠紅泥萬古春。

題友人所作。

四十九年搖片舌、三千刹海暗聲塵。何當臨死不知過、賣弄金軀惑亂人。(一本此偈次涅槃第二偈也誤入于此)

擘開滄海折珊瑚、活捉驪龍抉領珠。拋出人閒光不夜、蕩入人心目豁人愚。

涅槃。

摩胸告衆涅槃時、那日誰分詭譎詞。一個法身周法界、古今毫髮不曾移。

下生。

摩耶老特孕生犢、七步周行蹄踏蹄。惡水驀頭澆一杓、圖拽杷與拖犁。

和虎丘維那。

桶箍撒地笑擡眸、大地山河一贅疣。今日密付當日事、池寒水肅斂(劍)光浮。

狗子無佛性話、呈再來老和尚。

妖嬈萬態逞餘芳、花品名中占得王。莫把傾城比顏色、從來家國爲伊亡。(峯)古詩。

哭天目高峰和尚。

天目老人遷化去、有誰赤手起綱宗。木人淚落三春雨、石女聲號萬壑風。

悼中竺布衲和尚。有舍利。

生住中峯呵佛祖、死歸地獄受刑多。鐵丸業重吞無盡、散作人閒設利羅。

題洞宗寄建康天寧木瓶和尚。

鷄鳴紫陌曙光分、端肅容儀朝至尊。玉闕轉班金鎖合、四臣無復墮功勳。

知客化茶湯。

聖凡日日混融過、我也無心勘辨他。雷例與他澆一盞、聽教洪福及檀家。

友人上平江僧錄。

面奉論言一出禁圍、扶宗豎教正斯時。好將虎阜千人石、刊作中吳德政碑。

送行。

情懷老倒怕分携、況是春風二月時。去々江湖善求友、祖師門戶正顛危。

友人居山。

榮辱昇沈總不聞、藤蘿爲屋葦爲門。團々心鑑秋蟾白、一個羲皇世上人。

菜葉隨流出遠溪、古今難泯是和非。薺芽爛煮門深掩、莫下放幽香一度翠微。

送人之仰山。

滯殼迷封多種病、我無醫治老年華。子今莫憚三千里、

濟世名醫小釋迦。

隱牧號。

叢林荔鬱界晴烟、頭角深藏痛着鞭。^著祖禰田園秋草白、始拖犁杷出風前。

道士野仙號。

精陽爲炭地爲爐、煉汞烟消凡骨無。^著聚卽成形散成氣、何嘗着脚到玄都。

九返丹爐烹日月、七星寶劍斬龍蛇。消閑縮地游塵世、時服朝來數片霞。

淨髮待詔。

聲塵滿耳鑷難取、毛病通身又莫除。又鑷不施俱了了、老胡應合放頭低。

起僧堂。

功到無功功已周、雕欄畫棟彩光浮。是誰危坐三椽下、謾把虛空揣骨頭。

明州海首座江西死、訃音至悼之。

楚江鴈度鄮雲陰、錦字橫空展訃音。逆理事須爭到死、誰明二色見君心。

呈高峯和尚萬法歸一話。

拜辭無語獨徘徊、又聽霜猿繞樹哀。少室正傳今孰主、再來端的幾時來。

怕生怕死礙填胸、踏遍江山未樹功。忽地草鞋雙耳斷、

梨花雪白杏花紅。

和歸休子山居二十偈。

誰云觸處即吾鄉、歸隱來々事已強。性地默耕迷莽滅、善根深植道芽香。黃菁紫芋藏深穴、殞葉枯薪積敗墻。物外逍遙誰是伴、玉蟾舒影滿秋堂。

蘿牕華戶傍楓林、致境淘情貴寸陰。獻碧群峰無軸畫、漱清雙澗沒絃琴。亭前綠竹叢々玉、籬下黃花爛爛金。緬想金橫玉□者、眼頭無此發清吟。

一聲鐘韻絕更籌、名利迷人死未休。姜子清貧周世父、石崇濁富晉時囚。蒼松古性偏宜雪、莎草青葱不耐秋。獨倚寒藤倍惆悵、蕭々風景孰爲儔。

百結鶉衣遮漏質、蘿龕青晝坐端々。一機不昧真空合、萬法全超性地寬。透牖風香岩桂老、擲崖泉響石房寒。經年不見人相訪、惟有黃猿戲碧巒。

誰執人閒造化權、均霑萬有捻天然。風梳松鬢莖々直、日鑄苦錢個々圓。菊吐金英含玉露、鴈橫錦字破蒼烟。余生不屬陰陽轉、槁木形骸又一年。

榮辱昇沈捻不關、忘機情緒自閑々。探玄不用窮三際、辨見何須學八還。朝去暮回雙白鶴、春濃秋瘦四圍山。有時擊壤閑歌詠、萬仞崖前古檜閒。

松陰竹罽獨徘徊、體道求真不用媒。煩惱海中波浪息、性空籬上覺花開。從教秋鬢纒春蠶、一任山房長雨苔。老倒瞿

曇機未息、却云轉物即如來。

人閒是事俱拋下、水際雲根悅道容。凜々冰壺無朕跡、輝々心鑑絕磨礱。三玄戈甲當門棘、五位君臣要路松。胸臆未諳三八九、尋師訪道莫匆匆。

賦性賢愚總莫量、誠心問道自宜強。冥搜玄旨精華歎、極探真源妙叶香。五蘊頓空休更續、四蛇無毒不須防。崖根矮々茅簷下、坐卧經行捨道場。

銷爍玄微契祖翁、驅耕奪食起玄宗。敲空有響龜毛拂、擧木無聲兔角筇。風落斷崖雲片々、月生寒嶠水溶溶。河沙妙德俱方寸、心徑莫教苔蘚封。

和修西堂廊居二十偈。

養性怡神自有方、何須特地住高崗。松栽滿櫓呈山色、蘭萼盈盆散野香。日暮携朋歸酒肆、夜深和衲困魚行。時人見我休相訝、一種無心是道場。

自緣瓶雀不空飛、散襟懷度歲時。一法不忘非妙道、萬機寢削合玄微。盆花引蝶偷香粉、庭竹敲風落瘦枝。見性不彰功不泯、難教人免是非。

至道無難防揀擇、才形揀擇墮偏圓。靈明洞照無方所、妙粹冲虛不變遷。碁布花街烘暖日、鱗排鴛瓦護晴烟。有時息與經行處、絕勝林邊與水邊。

賣花聲在耳邊鳴、定性何妨熟不驚。竹榻紙衾和月白、樵樓畫角帶霜清。高提祖印窮玄旨、密展靈機顯妙明。

末世無_レ人_レ諧_レ此意、自籠_レ雙袖_二下_レ塔行。

山林城市元無_レ一、隨處生涯蘊_レ道光。百煉金埋不_レ虛變_レ、千

年松秀凍何妨。繫_レ驢破_レ厩光明藏、剖_レ腹屠行正覺場。一髮是

非情未_レ泯、莫_レ言_レ□枕住_レ城隍。

維摩一默發_レ春雷、聽者無_レ疑眼似_レ眉。須_レ向_レ不聞_二聞始妙、

莫_レ於_レ有見_二見爲_レ奇。金鞍馬上胡笳曲、玉笛聲中備_レ鬼兒。

不_レ是當_レ機會識破_レ、也須_レ防_レ有_レ翳睛時。

萬緣休罷更何陳、柳陌花衢自在人。兩手不_レ曾搖_レ木鐸、雙瞳

長是醉_レ紅塵。優游極探玄中髓、落魄亡_レ拘物外身。折脚鐺兒

隨處樂、肯分_レ岩谷與_レ城闌。

輪蹄竟逐_レ利名鄉、惟我閑々絶_レ較量。煩惱稠林無_レ寸幹、菩

提妙果有_レ餘香。松堂鐵磬清聲遠、瓦缶檀烟翠縷長。午夢覺

來指_レ睡眼、樓頭鼓角送_レ斜陽。

得_レ意忘_レ言合_レ自由、紅塵鬧市勝_レ林丘。無_レ名無_レ利一閑客、

有_レ酒有_レ花堪_レ上_レ樓。懶放_レ性靈_二霄壤窄、推_レ敲詩句_二鬼神

愁。可_レ憐儘々貪_レ求士、不_レ覺浮生一贅疣。

春風嫋々日遲々、飯罷徐行策_レ瘦枝。短巷長街飛_レ紫燕、古城

疎柳轉_レ黃鸝。鞦韆架上千般巧、百戲棚頭百種奇。捻_レ是妙明

眞覺性、瞻風撥草欲_レ何之。

和_レ清涼古林和尚韻。

強弱相凌耳厭_レ聞、潛藏渾似_レ避_レ秦人。一尋_レ紫標_二長爲_レ伴、

數朶青山久作_レ隣。風約_レ白雲_二屯_レ玉馬、水流_レ紅葉_二走_レ金鱗。

守_レ終終日無_レ他念、欲_レ禮_レ清涼_二未_レ了_レ因。

空門寄_レ幻獲_レ僧倫、湔_レ我瑕疵_二無_レ兩人。宿世有_レ緣今世友、

今生無_レ忤異生隣。常平_レ性地_二堪_レ栽_レ玉、密整_レ心源_二可_レ養_レ

鱗。六十二年成_レ一夢、昇沈榮辱總前因。

茅屋碁_レ山古澗濱、布裘蒲履一閑人。只憑_レ綠玉_二爲_レ良友、

難_レ把_レ黃金_二買_レ好隣。鐵磬罷_レ敲妨_レ宿鳥、石池添_レ水縱遊_レ

鱗。文殊只在_レ清涼界、未_レ卜_レ懷香_二理_レ舊因。

借_レ前韻_二送_レ上人。

壯志功名要_レ日新、須_レ求_レ世出世閒人。未_レ明_レ三學_二休爲_レ友、

遵_レ守五常_二堪_レ結_レ隣。少室單傳符_レ性地、禹門一躍脫_レ凡鱗。

省_レ師莫_レ學古靈叟、老背_二揮_レ非_レ正因。

借_レ前韻_二寄_レ灌頂用剛和尚。

一笑分携_二二十春、幾回翹首仰_レ仁人。巍々灌頂繞_レ千嶂、籍々

聲名絕_レ四隣。鷲嶺稠林栖_レ倦翮、鄞江湛_レ水躍_レ洪鱗。欲_レ依_レ

座側_二聽_レ中_レ女旨、久滯_二一隅_二非_レ善因。

借_レ前韻_二寄_レ彰勝古源和尚。

半生遁_レ跡罷_レ南詢、修_レ字無_レ郵見_レ故人。包笠同携壯日侶、

書牕共讀幻時隣。太虛廓徹翔_レ金鳳、滄海澄淳戲_レ玉鱗。媿_レ

我今年六十二、座隅胥會恐_レ無_レ因。

和_レ里人胡月江韻。

賢哲英姿世少_レ雙、世途難險貴_レ韜藏。懶攀_レ天上一枝桂、惟

愛_レ溪邊數畝桑。琢_レ句夜行檉徑月、尋_レ朋曉步板橋霜。我慚_レ

踪跡飄湖海、遙睇東南欲斷腸。

名山廣廈着閑身、榮辱昇沈耳不聞。因卧石床成蝶夢、

興遊樵徑混麋群。戒光炫耀千山月、眞性清奇一塢雲。惟

有二月江諳此意、不下將名節墮中功勳。

星易術士求。

四明境勝產佳士、星易能窮造化端。四象五行心裏斷、三元

八卦掌中看。良山陰下躡常靜、坎水陽中性不寒。莫謂君平

苗裔絕、秀山轟々聳危巒。

和友人山居。

愧我無能可屬時、情同鴝鵒遠山栖。紫崖石竇穿危嶺、

紅槿籬門出小溪。水鳥求鮮臨沼宿、山鷄報曉隔坡啼。

天然致境非粧點、不必蒙莊物自齊。

把茅高結白雲層、莫謂余生縱野情。萬善嚴身功未泯、群

魔削跡道方成。蘿牕皓月娟々淨、竹徑微風細細聲。妙轉化

權歸象外、萬靈千聖總虛名。

和光瑞翁建歸雲寺韻。

策杖徐々步曉風、惟聞新寺一樓鐘。鏗金曼玉四簷竹、

拔地擎空一徑松。雲際良山昂白虎、江臯坎水卧青龍。

天然勝地人間少、堪振雲峰那一宗。

堪東新構梵玉宮、畫角吟鳴雜曉鐘。鈍鑊自携開廢圃、

趣時遍地種新松。求玄仙客稠林鶴、聽法臞翁古洞龍。祖

禰化權須把定、莫教瑕滓少林宗。

示清上座。

未諳世法善求友、莫學猖狂人自瞞。萬事欲爲須守

分、一身處衆自然安。五常不缺尊卑備、三學無虧理事完。

再四叮嚀須聽取、做僧容易守僧難。

和山居十偈。

居鄜情緒懶、縛屋古崖根。春夏敷蘭蕙、秋冬產芷蓀。四

簷香不斷、萬慮我無聞。猶有鴝爲伍、時敲荔薛門。

縱步月明中、規心展笑容。西來無祖意、撈捩幾英雄。

春鼓花顏悅、秋粧木葉紅。宛然靈覺性、迷悟不相同。

天然諳法度、不用聞方來。白朮和霜掘、黃菁帶雨栽。

拾薪驚睡虎。移菊破蒼苔。雖是人閒事、人閒安可猜。

理事貫毫厘、浮生孰可羈。磬敲峰頂月、燈點古松枝。至

友數竿竹、餘糧一塢薇。偶逢塵世客、任說世澆漓。

絕壑幽崖裏、孤禪定起時。一生無繫念、二六合希夷。澗水

琴三品、山花錦一機。老胡心自昧、隻履又西歸。

功行無修證、閑眠鼻似雷。不同牛首老、百鳥獻花來。

佛祖一飛電、山川幾點埃。無人知此意、零露落桃腮。

一任鬢華秋、飯山是勝遊。齊芽和露摘、葦苗帶薪收。擊

徑通孤狖、開池養白鷗。直饒經劫火、無復下林丘。

學道雖明旨、窮玄理未全。通身開正眼、躡足欠紅

蓮。至聖元非佛、起凡不是仙。竹針聯壞衲、危坐過殘

遁跡喜相便、空岩逗短椽。門連三徑菊、竹引一泓泉。鹿卧生臺下、禽喧古澗邊。迷封兼滯殼、猶門四禪天。利生情未泯、遁跡尚無由。觸露尋雛鶴、臨崖飼乳猴。戒光千嶂月、眞性一天秋。試問探玄士、還曾契此不。

人問圓覺經大光明藏、以偈答。

萬德光明藏、聲前子細看。寬時函法界、窄置一毫端。靈焰騰金地、眞風拂翠巒。衆生迷滯甚、方便誘多般。

和天竺聽須韻。

洞古冷侵肌、三聲出翠微。驚回千里夢、恰好五更時。曉月和星落、陰雲帶雨飛。長途未歸客、秋鬢又添絲。

結夏乘拂。

頂顛豁開摩醯正眼、肘後高懸奪命靈符。一道神光古今無閒。天地以此光而蓋載、日月以此光而照臨、群靈以此光而養育、萬物以此光而發生。此光在聖賢而不增、在凡愚而不減。悟此光者、建法幢立宗旨、開鑿人天、無所不備。迷此光者、膩塵勞墮生死、輪還六趣、^(了)無出期。□□忘者、饑時食、渴而飲、熱則乘涼、寒則向火。大盡三十日、小盡二十九、^(隨)緣消白日、任性樂無爲。塵勞生死、菩提涅槃、克期取證、^(護生)禁足。鵝護雪蠟人水、總是閑家潑具、颺在破竹籬邊。從教日灸風吹、苔封蘚蝕、有眼何曾覩着。乘拂上座、如是告^(報)。□是上方拄杖、點頭始得。^(卓)拄杖一下云。有意氣時添意氣、不風

流一處也風流。^(復)□學長慶云、總是今日老胡者^(有)望。夜來堂頭和尚、敲出二尊宿、黃金骨髓撒在諸人懷裏了也。今夜乘拂上座、也不得放過。二老漢、識見偏枯、總是徐六擔板。若也濟北令行、不消一喝。

冬節乘拂。

黃面瞿曇、於平々陸地、起潑天洪濤、沒溺大地衆生、了無有出期、克由阿耐。後嘉禾有個跛脚阿師、頗有些子衲僧氣息道、我當時若見、一棒打殺與狗子喫、貴圖天下太平。俊哉。然雖如是、又遲八刻。被^(他)做^(成)伎倆沿流、至^(今)未^(能)勦絕。今夜乘拂上座、未免借上方拄杖、盡情掃蕩去也。^(畫)畫云。四十九年、三百餘會、搖唇鼓舌、腐爛葛藤、一時掃蕩、淨盡了也。直得、天清地寧、人和道合。洪鈞布煖、線日延長、衢童鼓舞、野老謳歌、共昇平之化。脫或未^(然)、一九^(與)二九、相喚不出手。復舉慈明揭榜公案、頌云、不是唐言非梵字、十字街頭狗脚踪。枯木堂中有住士、老饕何處着^(著)差容。

呈大夢、此老和尚後於五臺山立化、舍利不可勝計。

少林祖道今顛危、赤心起作堪憑。西川有叟頑且痴、心空眼活天人師。有時一喝轟怒雷、德山臨濟俱攢眉。有時提起黑竹篋、紛々衲子忘羈縻。邁古超今之眼目、鎔凡煅聖之鉗槌。世無伯樂九方臯、神駒駑駘誰分之。千岩萬壑雲霧慘、猿號澗壑風聲悲。愧我此身生太遲、明師未遇空奔

馳。今日處々片香禮、願賜一語開昏迷。□□□無悒慈
悲。

贈光藏主。

秋月明秋風涼、正法眼藏觸處全彰。靈山會裡金色頭陀、無端
破顏微笑錯承當。累及後代兒孫、各立封疆。雲門拋柴片。
趙州遶禪床。陸州道、有甚饅羅餠子、快下將來。總是平地
鋒鋦。四明山中有英士、雙瞳炯炯搖電光、一點耐僧問字。
截斷四十九年路布、無毫芒。直得、太虛消殞、獨露眞常。
少林祖道重恢張。

送禪人歸鄉。

正法眼破沙盆、如鐘在簾撼乾坤。醒群靈之痴夢、開宇
宙之迷雲。驀然領淵源、便欲歸鄉塚根。休塚根。祖庭寂
寞憑何人。

贈二月禪人。

禪々靈源、湛々秋圓通。冰壺凜々扶桑曉、一見分明光影中。
毫芒擬議乖玄宗。君不見、曹溪指月須忘指。指月雙忘
契眞理。又不見、南泉拂袖便行時、萬古清聲鬧人耳。

送禪人。

萬里無寸草、出門便是草。兩舌快如風、休向句中討。
擎空七尺軀、秘藏無價寶。去々宜善爲。靈光發現乾坤小。

送元海門挽回。

五髻峰叢林惡、威鳳那能久棲泊。展翅搏風曼漢飛、靈鳥

紫燕皆驚愕。我願飛去復飛來、爲瑞爲祥、免致祖庭蕭
索。

送人歸四明省親。

秋風高萬山、瘦削傷金甌。丹桂枝頭脫金粟、蒼松午夜翻
鯨濤。秋風驚起、秋思摩雲霄。侵晨江上租漁船、十幅布帆
輕鴻毛。鄞江水急聲滔々、到家有語休叨叨。雙親見了便
回首、祖庭寂寞無今朝。

期詰都寺遊山。

金風起寥廓、三日草鞋活鱗々。南嶽天台拄杖頭、高歌爛熳
朝夕遊。阿呵々、休未休。楊岐老漢眞良儔。

送華嚴講主。

禪餘策杖遊諸峰、松閒忽見厖眉翁。問渠隻影來何從、昂
然便語華嚴宗。善財初步福城東、等覺妙覺方伸功。微塵
刹土重無窮、普賢毛孔皆含容。瀾翻片舌如迅風、雙瞳
炯々搖晴空。英雄氣宇吞長虹、華嚴教海僧中龍。評今考
古言未終、遽然別我何匆匆。著龜未卜重相逢、令人戀々
填心胸。

寄城中才象溪。

保寧和尚云、平生疎逸無拘束、酒肆茶坊信意遊。吳地不
收秦不管、又騎驢子下揚州。這老漢、如麟斷索、似
鶴拋籠、肆意縱橫、欺胡瞞漢。雖然、千載之後、還有
繼其芳躅者麼。聽一頌。雞聲響畫欄、觸碎百千冤。德

行酒三盞、古今詩一聯。魚行千佛窟、姪室四禪天。物外金仙子、銀蟾到處圓。

拉古樵遊天目。

東西二天目、拔地摩蒼穹。古今賢哲逃其中、片言竟拉古樵翁。摩挲拄杖如獰龍、草鞋鼓舞生清風。披雲觸霧尋遺跡、捫蘿躡險登危峰。採星折桂臨蟾宮、嫦娥織女驚嬌容。張騫乘槎徒忽々、列子御風勞無功。有此佳期休相辜、樓頭鐘動趨前途。

送人之蔣山。

頂輕包一拳短策、行々氣貌乾坤窄。萬牛應拋一時難、鏡容正決有凌雲約。祖庭寂寞時羨君、展九萬里之扶搖翮。

送人歸金山。

龍淵窄龍淵窄、蛻骨蒼龍起頭角。攫霧拏雲歸海門、飛電引雷破山岳。長江濶波濤、瀨湧翻寥廓。於中輒莫久淹留、爲雨爲霖潤枯涸。

贈太平宮道士。

聽之不聞曰希、搏之不_レ得曰微。希微之道、廓徹無依。超凡入聖兮天地一指、玉轉珠回兮古今一時。英雄氣宇兮忘羈縻。高踏大方兮香風吹。

送閻維那。

頂門眼、肘後符、蓋天蓋地、無束無拘。一尋鍊錫、東震西瞿。躡霜破曉離姑蘇、茫茫六合之何居。

挽人參方。

君不見、圓悟未別成都城、醉於花酒呼不醒。翩然奮志遊江浙、聲喧宇宙無雷霆。又不見、荆山有片無瑣璧、乖崖怪石深藏形。一朝脫穎離荆楚、遼天高價輸連城。幸然有此爲標格、勇猛丈夫須脫畧。莫學鷓鴣戀一枝。大鵬一展九萬里之垂天翮。

送禪人入教。

大師剋建天台宗、止觀析名空假中。百千三昧無量妙義、皆含容。子去更衣善用工、聲前領旨超樊籠。貪記奇言巧語、轉使六塵六識擾々。輾作一團心腹、何年何日悟真空。拔濟滯殼并迷封膠。

送洞宗明首座住院。

叢林凋落、祖道湮微。我無腕力能扶持、猿號澗噫風聲悲。幸有仁人獲公選、高提鈿斧休遲疑。截斷三種滲漏、擘開五位君臣。成禪萬古天人師、楊廣山前玄鋒摧。錄公構得花鷹兒。連延線道忘高低。今時又是當時危、化權在握當思之。

送人歸澄江。

心同止水、天地一指、萬別千差、元非三理。呈圓相蠅鑽紙、杵珠坂丸、活鱗々底。歸去來兮、澄江漠々橫烟縷。

送人之江西禮祖。

楚山高楚江碧、祖師面目分明極。豁開心眼見無差、骨頭

節々黄金色。荒墳敗塚草連天、終不低頭苦尋覓。休尋覓。秋風秋雨聲浙瀝。

寄儔獨山住菴。

一聲呱地時、百千三昧足。業風鼓識塵、通身黑律漆。茫茫如是去、幾人能跳出。貪心若泰山、用行如狼毒。滿屋積珠珍、猶未稱心腹。惟有獨山翁、貪心斷無續。跳出是非名利場、高々峯頂住茅屋、十二時中無用心、只把瀉山老牛牧。行也牧坐也牧。忽然手裏芒繩成兩折、踏翻天輪并地軸、阿呵々笑復哭。目前生計一星無、祖師舊業俱恢復。只恁麼無拘束、六六依然三十六。

拙翁和尚問兜率三關、繼答之。

撥草參玄、只圖見性。不知上座性作麼生。

黑似漆明如日、取不得舍不得。萬靈千聖覩無門、金剛產下鍊崑崙。

識得自性、脫得生死。眼光落地、作麼生脫。

行便行坐便坐、一物無何規矩。掉臂江湖轉一回、豆花初放夕陽微。

脫得生死、便知去處。四大分離、向甚麼處去。

沒地頭有方所、見無見塞寰宇。怒雷轟碎五須彌、玉蟾照竭滄溟水。

四威儀。

山中行。鍊蛇古路橫、輕觸着、炎々毒氣生。

靈山道隱と『業識団』について (佐藤)

山中住。聖凡俱罔措、春復秋、花鳥來無路。

山中坐。寂々騰今古、擬思量、一翳塞寰宇。

山中卧。塊石如拳大、枕却頭、不知紅日暮。

慶都聞起龕。

栗棘金圈、鬼家活計。妙轉一機、風雲慶會。行人更在青山外。

孤上座鎖龕。

千車合轍、萬派朝宗。直下搆得、生死技窮。窮則變、變則通。暮々春雲鎖五峯。

勳典座起龕。

有二功勳無本據、踢倒淨瓶、聖凡罔措。出門踏斷生無路。

如庵主轉骨。

豎指擎拳、機如掣電。出死入生、萬化千變。換骨靈丹須九轉。

富都寺起龕。

徹骨窮貧、潑天富貴。漏燈盞動地放光、涅槃城笙歌鼎沸。歸去來兮風雲慶會。

韶都寺鎖龕。

簫韶聲裡、生死海中。全機作用、金圈栗蓬。五色祥雲鎖五峯。

守都寺起龕。

能守_レ愚曰_レ智、能運_レ智曰_レ惠。惠光洞照、生死頓空。三脚驢
子弄_レ蹄行、（脚頭）脚尾生_二清風_一。

山侍者起龕。

國師三喚、（鐵）鍊壁銀山。侍者三酬、銀山鍊壁。撫龕一擊_二碎兩
重關、死生俱透徹。門外春風寥次。

行者智麟起龕。

（著）着_二曹檄_一去、固閑_二玉籠_一藏_二鷺鷥_一。傳_レ衣夜半、放開_二金埒_一
縱_二麒麟_一。恁麼去莫_二因循_一。再來方可_レ續_二芳塵_一。

智鏡起龕。

菩提無_レ樹、明鏡非_レ臺。賣_レ柴漢、死中作_レ活。剗_二殿前草_一、
騎_二聖僧頂_一。老丹霞窮急計_レ生。二岐抹過、肆意縱橫。大道
無_レ人獨自行。

種松道者火。

盡_レ力一鋤、鑿_二開心地_一種_二靈根_一。周_レ家一宿、年少歸來傳_二鉢
袋_一。有_二此規範_一、汝當_レ護惜。烈焰光中轉_レ得身、濁港古路如_二
絃直_一。

斫_レ柴長行起_レ材。

（艱難）陟_二巖嶮_一歷難々、一肩春色、萬疊青山。通身放下、不_レ戀_二塵
寰_一。扱_二折長衝擔_一、跳_二出鬼門關_一。古路迢々獨往還。

跋_下賀_二焦山侍者_一頌軸_上。

繩床三擊_二碎韓公_一、曠劫迷封_レ恐有_二脫字_一背_二一揮_一諸方古今邪
解。恁麼則縱_二萬里長江_一爲_二一廣長舌_一、說_二八萬四千偈_一、鳥足_レ

賀_レ之。其或未_レ然、滴水水生。

跋_下送_二人哭_レ師頌軸_上。

十方刹土、爲_二一自己_一、師情何來。一切音聲、捻是妙音、哭
從_レ何有。於_レ斯見得、師恩子孝、一時周匝。脫或未_レ然、斜
倚_二孤墳_一一揮_レ淚、雨聲敲_二碎萬山秋_一。

鄉人祭。

四緣假合兮六塵擾々、桑梓森秀兮春風嫋々。一息歸_レ真兮太
虛杳々、聊伸_二薄奠_一兮哀_二腸永訣_一。尚享。

法眷祭。

棠棣森秀、擬_下作_二陰涼大樹_一覆_中於_上人。豈知、毘嵐風作_レ惡一
枝傾折。嗚呼、綠陰仆_レ地兮涼銷影滅。霧慘雲愁兮澗泉聲噎。
聊伸_二薄奠_一兮哀_二腸永訣_一。

朝陽穿_二破衲_一。

是針非_レ針、是線非_レ線。針線兩忘、天然一片。從教紅日墮_二
天岸_一。

對_レ月了_二殘經_一。

念々無_レ差、字々無_レ錯。心與_二月明_一、理事俱覺。襲々清風動_二
寥廓_一。

靈山首座、向_二赤肉團上_一壁立萬仞處、拶_二出一句_一。如_レ氷如_レ

霜、如_レ金如_レ玉、衲僧咬嚼不_レ破。謂_二余不_レ然_一、請閱_二是錄_一。
延祐己未春、徑山老叟希陵題。

宋靈山隱禪師傳。〈京大本ニナシ〉

禪師、諱道隱、號靈山。不知何許人、亦不詳其姓氏。少乘奇操、慧解不倫。游又衆典、尤喜華嚴。參雪岩欽和尚、得旨。文保二年東渡、住淨智建長一大刹。嘗瀝指上鮮丹、書襟華藏海之文、滿八十一軸。頌曰、百城煙水螭螟眼、五十三人驢馬羣、額有圓珠一皮有血、鍼鋒毫末定功勳。又墨書云、一眞法界一言無、鐵硯磨穿道轉迂、彈指聲中雙眼活、蜂房螳穴摠毘盧。贊善財云、頓忘三際百城沈、五十三人一寸心、錯去覺城東際日、登山渡水幾沈吟。示寂、敕諡佛慧禪師。有賜號佛宗眞悟禪師子介者、師得法上首也。

贊曰、毘盧華藏海、深不能窮、廣莫可測。靈山遠祖、牧衆之暇、等閒把一毛錐子、一攪攪翻、了無涓滴。然後從無涓滴處、湧出萬丈洪波。直得、無盡蘇迷樓、無量日月輪、一時顯現。且道、是禪耶、是教耶。高泉東渡諸祖傳。